

平成21年度
小平市市政アドバイザー会議
報 告 書

小 平 市

■ はじめに

市政アドバイザー制度は、市政全般について、幅広い知識と経験を有するアドバイザーの方に専門的な立場から、問題提起、助言、提言をいただくことを趣旨として、平成19年度から設置したものです。

今まで、市民の方から市長が直接に意見等を伺う機会として、タウンミーティングなどを行ってきましたが、一方で各界で専門的に活躍されている方々から、市長が直接、問題提起をいただき、懇談をすることで、これまでと違った視点での提言などをいただくこととしました。

平成21年度は、農業体験ファーム「みのり村」農園主 粕谷 英雄氏、NPO法人 地域産業おこしに燃える人の会 理事長 関 幸子氏、NPO法人 小平・環境の会 理事長 馬場 悦子氏の3名をアドバイザーとしてお迎えしました。関氏には会議のコーディネーター役を務めていただき、「こだいらの売り出しかた、盛り上げかた」をテーマに、3回の会議を開催しました。

この報告書は、アドバイザーからいただいた提言の要約と、あわせて市の現状の取組状況を掲載しました。巻末には、付属資料として会議要旨を掲載しています。

今後、アドバイザーからの提言や助言につきましては、新たな市政への提案として活かしていきたいと考えています。

平成22年6月

■ 目 次

開催の概要	1
-------	---

アドバイザーからの提言の要約（五十音順）

・ 粕谷 英雄アドバイザー	2
・ 関 幸子アドバイザー	5
・ 馬場 悦子アドバイザー	8

付属資料（会議要旨）	13
------------	----



■開催の概要

平成21年度 小平市市政アドバイザー会議テーマ
「こだいらの売り出しかた、盛り上げかた」

平成21年度 小平市市政アドバイザー（敬称略、50音順）
粕谷 英雄（かすや ひでお） 農業体験ファーム「みのり村」農園主
関 幸子（せき さちこ） NPO 法人 地域産業おこしに燃える人の会 理事長
馬場 悦子（ばば えつこ） NPO 法人 小平・環境の会 理事長

■第1回小平市市政アドバイザー会議概要

開催日時 平成21年8月6日（木）15時～17時

開催場所 小平市役所5階502会議室

出席者 小林市長、粕谷アドバイザー、関アドバイザー、馬場アドバイザー
（事務局）（傍聴者1名）

会議内容 こだいらのまちおこし、地域おこし
～まちの活性化の手法、可能性、方向性

■第2回小平市市政アドバイザー会議概要

開催日時 平成21年11月12日（木）15時～17時

開催場所 小平市役所5階504会議室

出席者 小林市長、粕谷アドバイザー、関アドバイザー、馬場アドバイザー
（事務局）（傍聴者0名）

会議内容 こだいらのイメージアップ、魅力アップとその発信
～PRポイント、いかに発信していくか

■第3回小平市市政アドバイザー会議概要

開催日時 平成22年2月8日（月）15時05分～17時

開催場所 小平市役所5階503会議室

出席者 小林市長、粕谷アドバイザー、関アドバイザー、馬場アドバイザー
（事務局）（傍聴者2名）

会議内容 まちを盛り上げるための人づくり（地域の人材が元気になるには）
～地域の人材づくり、ネットワークづくり、行政の役割、全体を踏まえた
総括的な提言

■ 粕谷 英雄アドバイザーからの提言

▶小平市の魅力、地域資源

- ・環境として緑資源は十分にあり、これを活かしていくことがひとつである。
- ・小平市は駅が7つあり、坂がなく平らで移動も楽である。また自然災害も少なく、非常に便利なところであると思う。
- ・ほかの自治体では、駅周辺は非常に都市化が進んでいるが、そこを離れると不便であるというところもある。小平市の場合は、どこをとってもあまり地域差、市内の格差がなく、平均的な環境があると感じている。
- ・市民活動団体が多くあるので、活動団体と市の連携や、団体同士の連携により、新たな展開が生まれる可能性がある。

▶産業の活性化、地域の活性化

- ・しっかりした理念と志を持った農家を育てることが大切であり、また市民・消費者の中からも、農業への参加を促していくものにならないと、農地の減少は免れない。
- ・「こだいら菜の花プロジェクト」¹のように、土地が活用されていることは大事である。採算ベースに乗せるには別の手当が必要かもしれないが、現在積極的に使われていない農地に、例えば小麦などを作付けできれば、かなりの生産量になる。農業者以外でも意欲のある人、使命感や志を持った人が、そういった農地の活用に携わってくれば、活性化の要素はかなりある。
- ・農地の貸し借りに対して、農家は抵抗感を持っているので、そこを行政が間に入って安心だということになれば、貸す農家も出てくると思う。農地の貸し借りに対する農家の不安要素を、取り除く必要がある。
- ・農家の庭先販売は、農家と市民との接点としてよいものだが、過当競争になって限界が見えてきたとも感じている。そこで、野菜のクーポン券を発行する取組みを提案したい。クーポン券でお得感を出したり、また直売は季節により品ぞろえが異なるので、クーポン券でこれからどんな野菜が採れるのかということ、先取りして紹介したりすることもできる。複数の農業者が共同で行えば、品目も増やすことができる。
- ・一次産品では価格が安い。直売所などでもジャムは売り上げがよく、加工品

¹ こだいら菜の花プロジェクト

農地を活用して菜の花などを栽培し、種を搾油してその廃食油をバイオディーゼル燃料（BDF）として利用する取組み

の付加価値は認められるようになってきている。農産物の加工設備の整備に対して、何らかの後押しができるとうい。

- ・加工品は、もうかるからといって合理化をしてはいけない。手間をかけることが一つの差別化になる。

▶情報の発信、PRの手法

- ・駅がうまく市内に点在しているので、駅を発信の場、広報の場として活用していけないか。
- ・各分野の市民活動団体などに対して、仰々しい「表彰」ということではなく、例えば「この団体は、この分野でこんなに活躍してくれた」などというふうに、柔らかな、できれば少しユーモアも加えたような形で、市が評価し、公表・紹介をしてはどうか。評価される側には励みになるし、市民に対してはPRとなり、「私もやってみたい」と思わせる刺激にもなる。各課の関連する分野でこうしたことができれば、非常に効果が高いのではないか。



粕谷 英雄 氏
農業体験ファーム「みのり村」農園主

▶人材づくり、ネットワークづくり

- ・体験農園は市民のニーズがあるので、農業者に対して、体験農園を開設するための勉強会を開いてもよいのではないか。
- ・中長期的な人材の養成が大切である。10年先の指導者を養成する勉強会、講座が必要ではないか。人材育成に投資すると、育った人材が、次のアイデアを出していく。
- ・若い人たちがこれからの知恵・力を出せるような環境づくり、きっかけをつくれるような取組みがほしい。単発的なものではなく、継続的な勉強会などができるとうい。最近の若い人はなかなかリーダーになりたがらないので、

若い人がリーダーシップを発揮できるリーダー養成のような刺激がほしい。

- 市を越えた広域で、連携して研修を行うような取り組みや、同世代として共通の話題もあるだろうから、若手が業種を越えて交流する場、組織などができるとよい。
- 連携により次に生まれるものがあるので、市民活動団体同士が出会える場、情報交換できる場があるとよい。また、積極的・誘導的に結び付けていってもよいのではないか。

■ 関 幸子アドバイザー

▶小平市の魅力、地域資源

- ・小平市のまちをどう売り出していくかということのベースは、「農」ではないか。農地を残してきたことは、これからすごく財産になる。「農」が二次産業、三次産業化していくのが、ひとつのブランド化であると思う。農地を、景観として残すだけではなく、営みとして富を生む、価値や安心安全を生むというところに、ぜひ大胆に転換してほしい。
- ・体験農園なども、子どもたちが土に触れる、子育ての現場になることができる。「農」が、ある意味で次世代を生む教育の場となる。それが次の世代の小平市への愛着にもつながる。
- ・市内に大学、専門学校など教育機関が多いことは強みである。
- ・市内にパティシエの専門学校があつたり、商店街によい和菓子屋が多く残っていたりするので、スイーツも地域の特色になるのではないか。「農」とのコラボレーションなども考えられる。
- ・他地域の事例にも関心を持って、その上でもう一度小平市を見ることで、さらにはっきり小平市が見えてくると思う。アンテナを立てて、小平市というまちが日本の中でどういう位置にあるのか、どういう方向を目指していくのかを常に確認することが、さらに小平市の魅力をつくることになる。

▶産業の活性化、地域の活性化

- ・一次産品では安いものを、農・商・工が連携して付加価値を付け、経済的に回るような仕組みにしていくときに、その消費地としては、小平近郊に数百万人の人口があり、十分に経済圏として消費者を持つ地域であると考えれば、思ったより面白い出口を探せる。よいものができれば、市内で売るだけでなく、都心部でも十分買ってもらえる。産地と消費をきちんとつなぐことも重要である。
- ・農家の庭先販売は展開されているが、例えば「道の駅」のように、もう少し大きく、あるいは複合化・連携して展開し、市外の客を取り込むことを考えてはどうか。また、都心のレストランなどで、なるべく鮮度がよい有機農法の食材を近郊から買いたいという需要もある。農産物を、市民に対するアピールだけでなく、もう少し戦略的に市外の人にも買ってもらう仕組み、高く買ってもらう仕組みを考えてはどうか。
- ・農業を市のブランドの柱にするならば、やはり食材としておいしいかどうか

確認できる場所として、市内にレストラン、実験店舗などがあるとよい。

- 農産物の加工などでのマイクロビジネス的な小さな産業は、小平市に向いているのではないか。地域の雇用にもなり、試行的に少しずつ始めれば、参加もできるし、一定の収入も得られるし、商品のファンもできる。1つでもよいから産業としておこしていくと、市民も面白いし、まちを訪れる方にアピールする「あんこ」ができる。「あんこ」が見えてくるとブランド力になるし、小平市のイメージアップにもなる。
- 例えば加工品の包装デザインはIT系の事業者、若者などが得意だと思うが、市内の産業同士のマッチングとして、企業リストのようなものがあるとよい。どんなにマイクロビジネスであっても、連携は必要だと思うので、新しい産業の面も一緒に育てるといふ掘りおこしは、ぜひしてほしい。

▶情報の発信、PRの手法

- 母親たちはほとんど携帯とネットで情報を取っているので、インターネット上でのしっかりした情報発信が必要である。母親たちが情報を発信できるような場所や権限を、市が用意できればよいのではないか。若い母親たちの発想を地域に出していくと、思わぬ効果が出てくるし、普段気づかないようなことも気づいてくる。地域の資源を見つけ出してくれると思う。
 - 小平市をイメージアップさせていく、ブランドをつくるというときに、小平市が持っているものは周辺自治体にもあるので、同じ都市農業といっても、他の自治体とはちょっと切り口を変えるとか、異なる発信のしかたをする必要がある。
 - いきいきと活躍している市民にスポットを当てて、もっとPRをしていくとよいと思う。それ
- によってあとに続く事例が出たりするし、小平市にはこういう



関 幸子 氏

NPO 法人 地域産業おこしに燃える人の会 理事長
*会議ではコーディネーター役を務めていただきました

人がいるという「人の顔」が見えてくると、明確な小平市の姿が見えてきて、小平市の強みを発揮できるのではないかと。有名な成熟した市民をつくること、まちのブランドをつくることになる。「人」が自信を持って発信すると、その「人」がブランドとなる。

▶人材づくり、ネットワークづくり

- 地域における人材育成の取組みとして、例えば市にある専門学校等と連携して、レストランやスイーツなどを考えてみてもよいのではないかと。
- 市内の大学とNPO団体等との連携は、参加することにより学生が大学で単位を取得できるなどの「仕組み」にできると、より根を張るのではないかと。
- 人材のネットワークのつくり方として、商工会や農協などが一緒になって分野を越えて、若手人材育成塾を共同で行うような仕掛けができないかと。塾でも研究会でも、幅広い人たちが入れるような仕掛けができるとよいと思う。
- 大学等教育機関との連携を含めた若年層の人材育成と、地元に戻ってくる団塊世代などシニア層の市民力を醸成する地域連携と、それぞれの仕組みづくりを考えていけるとよい。

■ 馬場 悦子アドバイザー

▶小平市の魅力、地域資源

- ・小平市の「売り」を行政が戦略的に打ち出すことによって、市民もそれを認識して自信を持てれば、小平市はもっとアピールできるのではないか。市民が、住んでいる地域を誇れる、自信を持って語れるということは、まちにとって大事だと思う。今までなんとなく「よい」と言われていたところを、きちんと見える形にしていけるとよい。
- ・農地を保全しつつ、いかに活用して小平市の「売り」にしていくかということが、ひとつのキーとなる。
- ・食料自給率も低い中で、小平市には農地という食料生産の基地があることを売り込む形、食農教育もできるという売り込み方がよいのではないか。
- ・昔に戻ることはできないが、新たなブランドをつくるというよりは、もともとあるものの復活ということもよいのではないか。都心から30分くらいの場所に、まだそれほど高いマンションもなく、畑や「小平ふるさと村」があるという環境、風景を売り込むと同時に、直売所などで訪れた人がお金を落とすような仕組みをつくっていくとよいのでは。

▶産業の活性化、地域の活性化

- ・グリーンロードは市の周囲をめぐっており、駅からグリーンロードには、すぐに入れるようになっているので、グリーンロードと畑をうまく組み合わせ、例えば何々駅から行くコースとか、食のコースや農業体験のコースなど、さまざまなコースをつくると、飽きずに何回も訪れてもらえるのではないか。グリーンロードを歩いていく中で、小平産の野菜や、ブルーベリーの加工品などの販売所があれば、そこでお土産を買うこともできる。
- ・直売所やファーマーズマートのようなものがあちこちにあって、訪れた人と農家が交流できると、農家も元気になっていくのではないか。複数の農家が1か所に集まって農産物を販売する場が、駅周辺などにもう少しあれば、地産地消ももっと進むし、小平市の野菜の自給率も上がる。
- ・何か特徴のある野菜や、少し目先の変わったものを作るなど、農家に小平産野菜のPR、売り出しをしてほしい。
- ・「こだいら菜の花プロジェクト」のような取組みが、小麦などほかの作物でもできて、地域活性化に役立てていけるとよい。
- ・農業をやりたい、土に触れたいという市民は多くいるので、体験農園がもう

少し広がって、それをうまく取り込んで、やる気のある農家を残せるとよいと思う。

- ・農・商で連携・分担して、加工品作りや農家レストランなどをやれたらよいのではないかな。

▶情報の発信、PRの手法

- ・情報発信をする際、市はある程度公平性を持たねばならないところがある。例えば商店の情報を発信する場合など、民間の団体の判断でやるほうが、自由度がある。協働のありかたを考えていけるとよいと思う。
- ・若い母親たちに記事を書いてもらうなど、クチコミ情報のように、市民の目線で小平市を売り込むと、親近感がわく内容となる。
- ・例えばエコショップの認定制度であるとか、地場野菜の割合が高いお店や特徴のある農家などを、市が何らかの基準で認定することにより、消費者の購買意欲を誘うこととなり、まちの活性化にもつながる。
- ・グリーンロード推進協議会が、観光協会のような役割を担うとよいと思っており、協議会ホームページの情報発信も充実させていきたい。
- ・パンフレットなども使い、どんどん発信していくことが大事である。字体やデザインなどの表現方法等も、さまざまな層に手に取ってもらえるような工夫が必要である。
- ・インターネットでの情報発信だけではなく、いろいろな場に出て行って、直接つながること、対面で宣伝することも大切である。



馬場 悦子 氏
NPO 法人 小平・環境の会 理事長

▶人材づくり、ネットワークづくり

- ・もう少し個人を支援できるような制度があるとよい。コミュニティビジネス

などの起業のノウハウからアドバイスして、起業を成立させるものがあるといよいのではないか。専門家を頼んでもよいが、市内で活動している先駆者がノウハウを伝えていくような形もよいのでは。

- 例えば農業者などが、学校に行って若い人たちに話をし、地域に「農」があることのよさをアピールするような取組みもよいのでは。
- 市役所の職員も、学生やNPOの活動の中に入って、市民の動きを肌で感じるような場を体験してほしい。職員が、現場で市民と活動する機会をつくることもよいのではないか。
- 市民の活動はさまざまな分野にまたがることも多いが、例えばNPOが市と連携しようというときに、市役所は担当部署で縦割りになっているので、もう少し横断的に柔軟な対応ができるとよい。
- 若手のやる気のある人を集めた農業、商業などの垣根を越えた異業種交流会のような場を設定し、短期間で終わらせるのではなく、継続していくことによって、生まれてくるものがあるのではないか。既存の業界組織を越えた働きかけも、必要なのではないか。

～小平市の「まちの魅力づくり」の取組例～

小平グリーンロード（市内一周緑道）を軸とした魅力づくり

小平グリーンロードは、狭山・境緑道、野火止用水、玉川上水、都立小金井公園を結び、小平市域を一周する水と緑の散歩道です。平成16年に「美しい日本の歩きたくなる道500選」（日本ウォーキング協会）に認証されており、周辺には、「平櫛田中彫刻美術館」、「ふれあい下水道館」、「小平ふるさと村」、「こもれびの足湯」、「あじさい公園」、「齋藤素巖・彫刻の小径」など、市の文化施設や観光名所が多数あります。

平成10年には、「小平市グリーンロード推進協議会」が設立されました。協議会は、「市民協働の力でグリーンロードを活用しながら、産業の活性化と歴史的遺産であるグリーンロードの水と緑の育成・管理に関わって、自主的かつ組織的に実践活動を行い、豊かで活力のあるふれあいのまち、喜びと楽しみをわかちあえる住み良い小平を築くこと」を目的としています。

現在、協議会は、「魅力づくり」「イベント」「広報PR」の大きく3つの柱で、活動しています。

- 魅力づくり…「野草保護ゾーン」（グリーンロードに自生している野草の保護・育成）、「花街道」（グリーンロードの花の植栽・育成）、「齋藤素巖・彫刻の小径」（市内で創作活動をしていた彫刻家齋藤素巖の作品のグリーンロードへの設置）、「こだいらオープンガーデン」（個人の庭などを一般の人に公開する活動）など
- イベント…「ガーデニングコンテスト」、「グリーンロードウォーク」、「花まつり」（桜の花の時期に開催）、「収穫祭」（秋に開催）、「灯りまつり」（夏に開催。小平グリーンロードを会場に市民が作った灯ろうを飾るイベント）など
- 広報PR…マップ作成、ホームページ

また、「小平ふるさと村」（開拓ゾーン・農家ゾーン・近代ゾーンに各時代の復元住居を配置した見学施設。施設を活用した行事・催しを実施）は、従来の直営施設から、平成21年度より新たに財団法人小平市文化振興財団が指定管理者として管理運営を行うこととなり、夏季の土曜日の開園時間の延長などの取組みを始めています。グリーンロード沿いという地の利を活かし、文化施設としての役割に加えて、観光の拠点的功能も視野に入れ、まちの魅力づくりとその発信に取り組んでいます。

ブルーベリーによる魅力づくり

小平市は、ブルーベリー栽培発祥の地であることから、その特徴を活かしたまちの魅力づくりに取り組んでいます。

これまでに、小平新特産品として、小平洋菓子組合や小平酒商組合で、ブルーベリーを使った商品の開発・販売を行ってきており、平成19年には、武蔵野美術大学の協力を得て作成した「ブルーベリー栽培発祥の地 こだいら」のシンボルマークを商標登録し、平成20年にこのシンボルマークの愛称を公募により「ぶるべー」と決定しました。



また平成20年7月、生産者・商業者・観光が一体となった市内産業活性化のための機関として、「小平ブルーベリー協議会」を設立し、小平産ブルーベリーを使用した商品の開発やPR活動、小平産ブルーベリーのブランド化を推進して、小平市の知名度アップ、魅力づくりに取り組んでいます。

平成21年度は、食を通じた健康づくり推進事業として、職員提案の事業化による「小平産のブルーベリーと野菜を使ったメニューコンクール」を開催し、応募メニューを小・中学校の給食献立に活用していく予定です。このほかシンボルマーク「ぶるべー」の着ぐるみが作られ、市の各種イベントで活躍しています。

丸ポストによる魅力づくり

小平市は、都内の自治体で、使用可能な丸型ポストの保有数が最も多い（日本郵便所有31本、私設2本、ほかにオブジェ2本あり。）まちです。時代とともに丸型ポストが減少する中で、「ノスタルジック」「かわいい」「丸型ポストを残してほしい」という声も数多く聞かれ、「丸いポストのまち こだいら」を、小平市の魅力のひとつとして発信していく取り組みをしています。

平成20年4月には、「小平ふるさと村」に移設保存されていたモニュメントの丸ポストが現役復帰して投函可能となり、市では「小平市丸ポストMap」を作成して、市内の丸ポストをめぐる散策コースを紹介しています。市役所敷地内にも丸ポストのモニュメントを設置し、訪れた方にPRをしています。

また平成20年度、財団法人小平市文化振興財団で「丸いポストのある風景 ポストカードフォトコンテスト」を創設して市民文化会館「ルネこだいら」で作品展を開催し、平成21年度には第2回が開催されました。

平成21年10月には、高さ2.8メートルの「日本一丸ポスト」が、地元商店会、市内郵便局で組織された実行委員会により製作、市に寄贈されて、市民文化会館「ルネこだいら」の正面に設置され、小平駅周辺のランドマークとなっています。

付属資料（会議要旨）



平成 21 年度第 1 回小平市市政アドバイザー会議要旨

開催日時	平成 21 年 8 月 6 日（木）15 時 00 分から 17 時 00 分まで
開催場所	小平市役所 5 階 502 会議室
出席者	小林 正則 市長 粕谷 英雄アドバイザー（農業体験ファーム「みのり村」農園主） 関 幸子アドバイザー（NPO 法人 地域産業おこしに燃える人の会 理事長） 馬場 悦子アドバイザー（NPO 法人 小平・環境の会 理事長） （事務局）伊藤企画政策部長、有川政策課長、篠宮政策課長補佐、相澤主査 （傍聴者 1 名）
会議次第	1. 開会 2. 市長あいさつ 3. アドバイザーからの問題提起、意見交換 4. 閉会
市長	<p>小平市では、市政全般について、幅広い知識と経験を有するアドバイザーの方に、専門的な立場から直接、問題提起、助言、提言をいただくことを趣旨として、平成 19 年度から市政アドバイザー会議を設置した。毎年度 3 人のアドバイザーを迎え、平成 19 年度は各アドバイザーの専門分野を中心に、平成 20 年度は「地域で支えあうまちづくり」をテーマとして「協働」をキーワードに、さまざまな提言や意見をいただいた。</p> <p>今年度の、粕谷アドバイザーは、小平市で初めての体験農園として、農業体験ファーム「みのり村」を開設されるなど、意欲的な取り組みを続けている小平市の都市農業の実践者である。「みのり村」では、座学を組み合わせた新しいスタイルの体験農園事業を展開し、利用者の方のつながりを大切にしたい運営により、農園が地域のコミュニティともなっている。</p> <p>関アドバイザーは、「NPO 法人 地域産業おこしに燃える人の会」の理事長を務め、地域産業の活性化に取り組んでいる。三鷹市職員時代に「株式会社まちづくり三鷹」の設立に携わり、また現在は、千代田区の「財団法人まちみらい千代田」の専門調査員として「秋葉原タウンマネジメント株式会社」設立に携わるなど、ご活躍中である。</p> <p>馬場アドバイザーは、「NPO 法人 小平・環境の会」を設立して理事長を務めるほか、「NPO えん」、「小平市民活動ネットワーク」、「Mystyle@こだいら」など、多くの NPO 活動に携わり、また「こだいら菜の花プロジェクト」の代表を務めるなど、地域においてさまざまな活動を展開し、ご活躍されている。</p> <p>今年度のアドバイザー会議のテーマは、「こだいらの売り出しかた、盛り上</p>

<p>関アドバイザー</p>	<p>げかた」とした。小平市は、平成 24 年に市制施行 50 周年を迎える。まもなく訪れる 50 年という節目を、小平の「まちの姿」を改めて見つめなおす機会としてとらえ、この「こだいら」をいかに盛り上げるか、いかに売り出していくかを考えていきたい。</p> <p>会議の切り口としては、地域資源を活用したまちの活性化の可能性や、効果的な情報発信のしかた、また、地域を盛り上げるための人づくり・ネットワークづくりなどといったことが考えられるのではないかと思う。アドバイザーの皆様には、行政内部とは違った視点からの問題提起や、斬新な助言、示唆などをいただきたく、会議のコーディネートについては、関アドバイザーにお願いし、アドバイザーの皆様相互の闊達なご議論などもいただければと思う。</p> <p>今年のテーマ「こだいらの売り出しかた、盛り上げかた」は、簡単そうに見えて難しいテーマである。こんなところが小平市の魅力だというようなことも踏まえて、まずは各自の現在の活動の内容などを紹介してほしい。</p>
<p>粕谷アドバイザー</p>	<p>今日は原爆投下の日であるが、戦後 64 年が経ち、小平市も充実期に入ったと思う。</p> <p>私は、平成 17～18 年度の「第二次都市農業基本構想」策定の際に、「都市農業基本構想懇談会」の公募市民委員として 1 年半活動したが、応募の際に「体験農園」と「農業公園」の提案をした。「農業公園」のほうは、基本構想の何ページか割かれてはいるが「検討する」との表現にとどまった。自分の課題としては今後も持っていきたいと思っており、これは公的なものと足並みをそろえなければ実現できないものなので、機会があればまた提案していきたい。「体験農園」は個人でできる部分も大きいので、当時、産業振興課に骨折りをいただき、ほぼ提案どおりの内容で開設できた。現在 3 年目となり、70 名弱の会員がいる。地域のイベントに積極的に参加し、今年も「灯りまつり」に参加して灯ろうを 35 個飾り、模擬店を 2 店出し、まつりも「みのり村」の会員も非常に盛り上がった。「花と緑のこだいらガーデニングコンテスト」にも個人として参加したが、今度は「みのり村」の会員に手ほどきをし、多くの人に参加してほしいと思っている。</p> <p>地域の中で、農業だけをやるのではなく、農業を通じて、周りにどう提案し、活性化につなげていけるかと考えている。農業にとどまらず、地域の活性化の引き金になるものにはどんどん参加していきたい。</p> <p>私も農業者としては長いわけではなく、長く農業をしている人の立場や考え方も理解しながら、接点を見つけていければと思っており、それがこれか</p>

<p>関アドバイザー</p>	<p>らの課題である。</p> <p>多摩地域でも、農業の基本計画を持っている自治体はそんなに多くはないのではないかと。小平市のひとつの優位性、特色は農業であるかもしれない。新しい人が入ることによって、農業、特に都市農業はいま変わろうとしているので、その第一人者としてのちほどまた話を聞きたい。</p>
<p>馬場アドバイザー</p>	<p>私は小平市に住んで 23 年になる。実家は練馬区で西武線沿線なので、小平市は元々なじみがあるまちで、住んでいてすごくよいところだなとは思っている。ここで子どもを 3 人育て、仕事をしている時期もあって、でもやはり地元で足をつけて地元のことを何かやりたいというところがあり、市民活動を 15 年程してきている。昔は仕事と並行で活動をしていたが、市民活動がうまく仕事になればよいなという思いはありつつ、今はどっぷり市民活動をしている。</p> <p>子どもを育てていて環境は大事だなという思いがあり、「小平・環境の会」を立ち上げ、2004 年に N P O 法人格を取った。環境といっても間口が広いが、私たちはごみに特化した活動をしている。特に生ごみをどうにか減らしたいということで、農業とかかわるようになってきた。7 年前、縁があって一緒にやろうという農家が回田町にいて、生ごみを堆肥にして野菜を作っている。ちょうど市の学校給食に生ごみ処理機が入ったので、その一次乾燥処理物を無料でもらい、落ち葉などを混ぜて堆肥にして野菜を作っている。</p> <p>そうこうしているうちに、農業は守っていかなければならないものだとつくづく思うようになり、「農のあるまちづくり推進会議」委員に公募市民委員として応募し、メンバーになった。そこでは、粕谷アドバイザーが携わった農業基本構想の内容に対して意見を言うと同時に、農業基本構想に基づく内容を実際にプロジェクト化してやっていくという、半分実行も担う形の会議だった。今もそれは継続しており、私は今年の 3 月で委員を辞めたが、その中で「菜の花プロジェクト」というのが出てきて、「小平・環境の会」にやらないかという話があり、花小金井にちょうど畑があるということで、一昨年からはまった。</p> <p>「菜の花プロジェクト」は、景観作物として菜の花を畑に植え、さらに環境の視点で、種にして刈り取って油にして食べ、その廃食油を集めてバイオディーゼル燃料にして、できたら公用車などを走らせたい、そういう形にまでしてもらえるとということで、土地を提供する農家も大賛成とのことでうまく話がまとまった。菜の花とひまわりから油を取っており、今年は 2 年目になる。</p>

<p>関7トバ伊-</p>	<p>やはり農地がないとこういうことはできないし、小平の売り出し方ということで、ひとつ、キーになるのは、小平の農地を保全しつついかに活用して「売り」にしていくのかということがある。</p> <p>一方で、縁があって、商工会の「小平ブランド開発委員会」に参加している。そこでは、小平のブランドをどうしようかということで、今アイデア募集をしている。去年はそれに先立ち、小平にどんなお店があり、市民がそれをどう評価しているかということをもとめた「コダイラブランド」(コダイラ(ラブ)ランド)という冊子を作り、好評だった。それでわかったことは、商業者もやはり小平をなんとか売り出したいと思っていて、農業と商業がうまくミックスした形がよいのではないかと思う。</p> <p>市民も、小平は住みやすいと思っている人が多いようだが、ちょっとコンプレックスがあるのか、例えば「中央線沿線には負ける」とか「国立にはちょっと勝てない」とかいうのが何かあるような気がするが、果たしてそうかなあと私は思っている。グリーンロードもあり、ブルーベリーもあり、もう少し自信を持ってよいのではないか。小平は何となく住みやすくよいというのはあるが、では小平の何を売っていったらよいかというと、言葉が詰まってしまうところがある。小平の売りを行政が戦略的にきちんと打ち出すことによって、市民も小平の売りはここなんだと認識して自信を持てれば、小平市はもっとアピールできるのではないか。地域に住んでいて、そこが誇れる、自信を持って語れるし、その物を紹介できるというのは、これからまちにとっては大事だと思う。今までなんとなく「よい」と言われていたところをきちんと見える形にして、商と農が手をつなぎながら売り出せるような形、そんな感じのものを思っている。</p>
	<p>馬場アドバイザーは、市民活動から起業家という感じで実践されているなと思う。地域コミュニティビジネスとして、まさに「菜の花プロジェクト」のように循環しているということは、ある意味、地域経済を回していることになる。</p> <p>私は今回、「地域産業おこしに燃える人の会」理事長ということで参加した。「燃える人の会」は全国組織のNPOで、それぞれの地域でのまちおこしの事例に出てくるような人が入っている。2003年度、政府が地域再生のプログラムのひとつとして、地域でがんばっている人を集めて総理官邸で懇談会をしながら、一層がんばれと国が背中を押そうということで、「地域産業おこしに燃える人」という称号をいただいた33人のメンバーと、その後選ばれた第2期の「燃える人」と、最終的に69人でNPOの組織化をした。</p> <p>このNPOは、メンバーは自分たちも地域の現場を持っているが、それ以</p>

外の「何もない」と言っている地域に、なくてもやれる事例、ノウハウ、エネルギーを届けようということで、地域でがんばって孤立化している人に「あなたもがんばれ」と背中をたたき、地域では変わり者で孤立していても、ふと目を上げれば全国にはこんなに変わり者はいるので心配しないでがんばれというような、エンカレッジ型のNPOということでやっている。

「燃える人」の2期のメンバーに、徳島県^{かみかつ}上勝町の、葉っぱを料亭におろしている「株式会社いろどり」の横石知二氏がいる。この葉っぱビジネスは、この地域は緑しかない、葉っぱしかないのをそれを料亭に売る、見え方としてはそういうことだが、実際のまちづくりとしてはもっと奥が深く、安心安全な葉を届けるために、上勝町では完全にごみを燃やすのをやめた。ごみを燃やすとダイオキシンが発生するので、料亭で使ってもらった価値がないだろうということで、生ごみはすべて堆肥化している。それ以外は完全リサイクル、もしくは売却していて、そこでは処理しない。またごみ収集車が行きかず、ごみは持ち込んでもらう。完全にリサイクルをするということが、まちづくりになっている。さらに上勝町では、葉っぱを取ってくるのは皆おじいちゃんおばあちゃんだが、インターネットで受注するというIT戦略をとっていて、また自分の収入があると病気をしている暇がないということで、県内一医療費が少ない町である。「葉っぱ」に注力してブランド化することで、いろいろな展開ができていく事例である。ただ残念なことに、この葉っぱビジネスは全国シェア70%以上を押しやっているのだから、二匹目のどじょうはないが、ビジネスの裏にあるまちおこしのノウハウは、かなり横展開できるだろうと思う。

私自身は、母の実家が小平の青梅街道駅の近くの農家で、私は「小川のおばあちゃんち」と呼んでいた。行くたびに畑の野菜をとって食べたことを、今でも覚えている。また祖母の家で一番おいしかったのは、地粉のうどんである。小平では人寄せのときはうどんであると思うが、このうどんもひとつの隠れたブランドになると思う。私が小さいころに比べると、小平もだいぶ市街地化が進んだが、毎年お盆とお正月には訪れていた第二のふるさとで、ご縁があるなと思う。親戚も市内にいる。また、小川駅の商店街は和菓子屋が多くあったが、和菓子も小平にとって何か歴史があるのではないかと。うどん、和菓子は、小平の売り出し方の中で、ルーツをつくりながら売り出していく商品の1つになるのではないかと。

私は三鷹市の職員だったが、今は千代田区で、秋葉原のタウンマネジメントの立ち上げに携わっている。ハードとソフトを融合した、エリアマネジメントという考え方があるが、これは税金を使ってまちづくりをするだけでなく、そのエリアから再度収入を得ようという考え方である。例えば、「東京ミ

<p>市長</p>	<p>ッドタウン」とか「六本木ヒルズ」がそうであり、これは民間の開発だが、投資した分、そこに来る人が商品を買ってお金を落としていくだけでなく、エリアの中うまく広告を散りばめて、六本木ヒルズでは広告収入が年 10 億円上がるように仕込んである。ハードを作るときに、作った費用が次の売り上げを生むように作っている。</p> <p>行政にはその感性がなく、税金で施設を作って、再度税金で建て替える、維持管理費用も常に税金で賄うという考え方だが、秋葉原では、税金を投入した建物やエリアからお金を生もうという手法が動き始めている。たとえばフラッグ広告、バナー広告など公共空間での一定の広告収入とか、あるいは民が公共空間で営業的にも催事をしてよいという手法で、公共空間を貸していこうというものである。道路でも公園でも地域にとっては「空間」であるという考え方であり、道路とか公園とかいうのはまさに行政にとっての色分けで、まちにとっては、そこをバザールとかイベントの場として、駅前や道路などの公共空間を貸してほしいというオファーが来ている。公共空間や名前がお金になる、地域の売り上げが立つという形で、経済としてバリューがあるということが都市部では見直されてきていて、国土交通省で、公共空間を地域に、非営利型の方には貸していこう、例えば歩道でカフェをやりたい、ワゴンセールをやりたいというときに貸せないだろうかということで、法律も緩和の方向に来ていることもあり、そういうことを秋葉原を通じてやっている。</p> <p>今までの行政のやり方に、大きな転換期が来ているかなと考えている。今、分権が大きなテーマになっているが、分権というのはそれほど簡単ではない。市民の自立のないところに分権をしても、だめである。分権で権限が地域におりると、判断やその責任を負っていかなければならない。国に依存して交付金などをもらっていたほうが、国や都道府県の批判をすれば済むので楽である。もともと市町村の守備範囲は、生活そのものを決めていくものである。朝起きて学校に行くとか、買い物をするとか、病気になったら医者に行くとか、生活そのものが市町村行政の守備範囲である。そこは、できるだけそこに住んでいる人が決めていくほうが、むしろ自然である。</p> <p>まちの運営は、もともと住民が持っていたものを、税金を払う代わりにやってくれと信託されて我々がやっているが、もともと市民が持っている権限や決定権などを戻していくことをやったほうがよい。その延長で、小平市のよさをもう 1 回再発見する中で、そういう運動がベースになっていく。ある人が思いつきでやって一時的にブームになっても、それは根付かないと思う。地域で盛り上がってくるものがあればよいと思う。もちろんそれだけで</p>
-----------	--

<p>関アトバヱー</p> <p>市長</p>	<p>はできないので、「菜の花プロジェクト」のようなことで、一種誘発していくことも、両方ないと根付かないと思う。</p> <p>自発的なものと、仕掛けていく政策と、両方必要である。</p> <p>小平は、歴史的建造物はあまりないが、市を外周するように小平グリーンロードがあって、玉川上水は文化財の史跡指定を受けているし、野火止用水は歴史環境保全地域に指定されていて、周辺には農地が残っている。また駅が市内に7つ、市境を含めると10あり、非常に便利である。こういう身近なところを我々自身が発見しながら、小平のよさを一度組み立てる、発信するために整理するとよい。</p>
<p>関アトバヱー</p> <p>馬場アトバヱー</p>	<p>私は三鷹生まれの三鷹育ちだが、都心に行って離れてみて、我がふるさと多摩地域にすごく価値があると改めてわかった。</p> <p>私は、子どもを自然の中で育てたいと思って小平の地を選び、20数年前のそのときは農地が残っていたが、今はその頃とはまた変わった。マンションもこんなにはなかった。私は、これくらいで止まってほしい、農地が減っているのをどうにか止めたい、ぎりぎりもうこれ以上は減らしたくないと思っている。グリーンロードは残ると思うが、中がどうなるか心配で、グリーンロードだけ緑が残って、というふうにはならないでほしい。</p>
<p>関アトバヱー</p> <p>粕谷アトバヱー</p>	<p>都市農地は、ある意味宅地としての不動産価値もあるので、農地転用の可能性も十分あるし、大体どこでも遺産相続の中で土地のかたまりが小さくなって、マンションになったり小さな街区の建売住宅になったりするという、まちのスプロールのような形で小さな開発になってしまうことがけっこうあるが、実際農地をお持ちの粕谷アドバイザーはそれをどう見ているか。</p> <p>農地が減るのは農業者として大変悲しいことだが、農業自体が非常に難しい状況に置かれており、生きる上でも大変な選択肢の1つだと思っているので、全部の農家に残れというのは酷なのかなと思う。やはり、しっかりした理念と志を持った農家を育てることが大切だと思う。まわりに言われてとか、長男だからしかたなくという状況でやる農業は、これからは特に難しいだろうと思う。</p> <p>市民の枠の中からも、農業への期待を、経済的なものだけではなく別な角度から、やりがい、生きがい、使命感的なものに持っていかないと、まわり</p>

	<p>からの重圧に耐えられない。経済面の見方だけでは、やっていけないだろうなという気がしている。それから、農業者と消費者が同じ視点でとらえるような農業になっていかないと、参加を促していくようなものにならないと、数の減少は免れないだろうと感じている。</p> <p>私も以前、西多摩から世田谷までいろいろな地域を勤務先として歩いてきた中で、先ほども話が出たが、小平は駅が7つあってどちらを向いても駅で、坂がなく平らで移動も楽である。また自然災害も少なく、非常に便利なところであると思う。小平に住もうと思う人は増えてくると思っている。現在の環境、緑資源は十分にある。これを活かしていくことがひとつであると感じる。</p> <p>また駅がうまく市内に点在しているので、駅を発信の場、広報の場として活用していけないか。小平は市内の地域差がない。ほかの市では、駅周辺は非常に都市化が進んでいるが、そこを離れると不便というところもある。小平はどこをとってもあまり地域差、市内の格差がないと思う。あまり劣等感を持つような地域も優越感を持つような地域もなく、すみからすみまで平均的な環境があると感じている。</p>
関7トバヱ-	<p>農業者にとって感じる重圧というのは何か？</p>
粕谷7トバヱ-	<p>ひとつは経済的な問題である。農業を経営できるだけの力、経営のノウハウと栽培のノウハウを持たなければいけない。栽培のノウハウは、皆職人なので、長くやるとそれなりの力をつけるが、今、経営は画一的なものではないので、自分なりの経営を確立していくことは非常に難しい。それから、第一次産業の宿命だろうが、一次産品は非常に安い。都市近郊だからといって都市近郊の価格が付けられるわけではなく、場合によっては中国産と競争しなければならない。いくら国産、地場産がよいといっても、価格には勝てない部分がある。消費者の選ぶものがすべて地場産というわけではないので、非常に難しい。二次、三次産業化して付加価値が付かないと、価格が上がらない。そういう中で収益を上げるのは難しい。私も、今の農業収入は元の仕事の給料には及ばない。私は、不動産業と合わせて農業をやっているが、これは農業を安心してやるための保険的要素でもあり、やはり農業外の収益も見込まないと安心して農業はできないと考えている。</p>
関7トバヱ-	<p>小平市の都市計画図を見ると、やはり商工業というよりも、住宅と農地で今までも生きてきたし、まちをどう売り出していくかということのベースは、いろいろ多摩地域を見ているが、「農」ではないかと思っている。平らで</p>

	<p>肥沃な土地を持っていて、農地を残してきた、それはこれからすごく財産になると思う。</p> <p>よいものを持っている小平の「農」が、これから二次産業、三次産業化していくのが、ひとつのブランド化であると思う。もうひとつは、「菜の花プロジェクト」ではないが、農地の所有と利用の分離をしていくということがある。農地法が改正されて、農業者だけが農業をやる時代から、アイデアを持った人たちが農地を借りてやるような、所有と利用を分離してかまわない、さらに法人が参入できるというところまで規制緩和してきているので、それは必ずしも大規模農地だけでなく、都市型農業にも改革の視点を持ってきて、せつかく残った農地を、景観としてだけ残すのではなく営みとして富を生む、価値や安心安全を生むということに、ぜひ大胆に小平市には転換していただきたい。</p> <p>粕谷アドバイザーがされている体験農園なども、今は子どもたちが土に触らずに大きくなっていく状況があるが、原体験として植物の青臭さや、産みだての卵の温かさなどを感じ取れる、子育ての現場になることができる。「農」が——キッズランドのような「体験」をわざわざ別の場所にさせに行くのではなく、ある意味で次世代を生む教育の場、営みの場がそこにあるという視点で、教育、子育てをしてほしい。それが次の世代の小平への愛着にもつながる。脳科学者の話では、5、6歳くらいまでに感性が決まるといわれているが、そういうときに自然や土に親しまないのではもったいない。そうした体験から、芸術的感性や才能が生まれる。</p> <p>粕谷アドバイザー 小平が、そういう教育機能を持っている市であるということは貴重な部分だと思う。先日も収穫体験で、幼児雑誌のグループが、幼児に収穫をさせ、その場で食べさせるとして100名近く集まったが、小さなときにそういう体験ができる場は非常に大切だという気がする。</p> <p>関7アドバイザー 若い母親世代に、ぜひそうしたよい環境を見てほしい。</p> <p>粕谷アドバイザー 特に幼児の場合、母親から入る知識がどうしても強いので、共通の話題になるような体験をしておいてもらえたらな、という気がする。小平は、そういった体験をできる機能を持っている市であると思う。</p> <p>市長 粕谷アドバイザーの、先ほどの提案の「農業公園」は、どのようなものか。</p>
--	---

粕谷アドバイザー

「第二次都市農業基本構想」策定に携わった時に、小川町1丁目の土地区画整理事業が始まり、私は、こういった規模のものは小平ではもう最後の場所であり、玉川上水にも接しているので、その環境を利用した形で開発が進めばよいと思った。地区内にはキャンプ場もあり、防災機能なども含めて——ブランコや滑り台のある公園や地域センターも、どこにも同じものを作るということも大事だが、地域の特殊性を持たせたものにしてもらえたらよいと思った。

地産地消、ごみの問題などが、「ふれあい下水道館」のような見学・教育施設とからめて行えば、ごみ処理場などはいやがられる要素を持ったものなので、むしろ見学・学習施設としてその中に組み込んでしまう。周りにある農地は、農家と提携してそれを借景とし、作付けなどは少し歩み寄ってもらって説明を加えるような周遊路をつけるなどして、堆肥づくりまで一体のセットとなったような地域づくりをしたらどうか。大きな公園を造るということはなかなか難しいので、その地域全体を公園と見立てられるような作り方をしたらと考えた。そこに行けば農業のあり方が縮図として見られる——ごみの処理は今、厄介者だからなかなか難しいが、見学・学習施設に組み込めば、否応なしに必要性も理解してもらえるし、そのほうが自然だろうと考え、そのときに私のプランとしてその場にぶつけたが、難しいとの意見も出た。

埼玉県の川本町（現：深谷市）にある「埼玉県農林公園」は、農業の堆肥施設や栽培施設、販売所まで含めて、1周してくると出口で野菜を買って帰れるような施設になっており、体験をする場から、最後はおみやげ付きで帰れるというような場所に設定されていて、非常によいところである。ただ、この辺りではスペースがそれほどなく、それをコピーするのは無理なので、民間の畑をそのまま借景にして、周遊路と案内板などをうまくつけば、地域全体を公園としての機能を持たせられるのではないかと、教育機能を持つ地域にすることができるのではないかと考えた。

関アドバイザー

今のひとつのヒントとして自給型ということ、それから馬場アドバイザーの言っていた農と商、そして工についても小平にはマザー工場がいくつもあつるし、多摩地域全体は技術力があるので、農・商・工が連携して、一次産品だと安いものを、どう経済的に回るような仕組みにしていくのかということ——遠くに売りに行くというよりも、小平を中心としても数百万人が住んでいるのだから、十分に経済圏として消費できる、消費者を持つ地域であると考えれば、思ったより面白い出口を探せるだろうと思う。

馬場アドバイザー

粕谷アドバイザーの「みのり村」はグリーンロードに面しているし、市内の「畑のおじさん」という別の体験農園もグリーンロードに面している。グリーンロードと畑をうまく組み合わせ、農業公園的な、販売所があってそこには小平産の野菜があり、なおかつ商業としてブルーベリーの加工品などもあってよいと思う。そういうものがあれば、買い物は皆けっこう好きなので、そしてまた駅からグリーンロードには、どこからでもすぐに入れるようになっているので、駅からグリーンロードに歩いていく中でそういうものがあって、お土産も買って、なおかつ「こもればの足湯」もあるし——そういうものをセットでコースとして売るとよいのではないかな。

それから、食育という問題で、先ほど畑の土に触れると子どもにもすごくよいという話があったが、私たちのNPOも収穫祭をやっていて子どもたちが来るのだが、母親が、土は汚いから触っちゃだめとか、その手は舐めちゃだめとか止めたりする、とんでもない時代になってきていると感じている。母親から子どもに、畑にはこういうものがあるとか、こういうふうにつつとか教えてほしいのだが、母親自体に知識がなく、畑の土は汚い、ばい菌だらけというようなことで、子どもに触らせないという状況が、小平でさえある。そういうことも含めて、親も子も、畑はどのようなものか、食べるものはどういうところから来ている、何を食べたらよいのかということ、体験として教えられるような農業公園みたいなものがあるとよいのではないかな。これからは食べることがとても大事だし、自給率も低い中で、小平には農地があり食料生産の基地がある、そこをもうちょっと売り込む形で、「もの」プラス食農教育もできる、という売り込み方がよいのではないかな。

関アドバイザー

先ほどの上勝町の例のように、ひとつポイントを「農」と定めると、展開が大きくなってくる。

もうひとつ提案したいのは、母親はほとんど携帯とネットで情報を取っているので、インターネット上でのしっかりした情報発信が必要である。三鷹市では、「みたか子育てねっと」という子育て中の母親に見てほしいサイトがあり、これは情報の3割は市が作っているが、残り7割は、地域の母親が記者として取材・体験して情報をアップしている市民参加型のサイトである。「株式会社まちづくり三鷹」が一括して市から受託して、記者の母親たちに対して地域ビジネスとしてきちんと謝礼を払っている。

ほとんど記事の検閲はしない。市長が言ったように、市民の自立なくして地方分権はない。使ってもらう以上は母親が本当にほしい情報を載せざるを得ないということで、何かあったら市のサイトなので市が責任を持つ、ある程度までは母親たちに任せるということで、腹をくくってやっている。私が

<p>馬場トバイザ</p>	<p>携わった5年間でトラブルは3回あったが、市民の方は正直で、通り一遍ではなく生きた情報を載せる。母親たちに編集会議をやってもらったうえでアップしていくので、そこは市民力を信じて、一定のところで預けている。これが奏功して、市役所の仕事をしているということで母親の自信になる。金額的には小額だが、通常50人の母親たちが好きにやっており、パソコンや場所は用意している。母親もネット世代なので、情報を発信できる場所や権限を市が用意できればよいのではと思う。</p> <p>母親たち50人のうち20人くらいは、「子育てコンビニ」というNPOのメンバーだが、この代表者は全国に引っ張りだこで講演をしている。こうした有名な成熟した市民をつくるのが、ブランドをつくることになる。「人」が自信を持って発信すると、その「人」がブランドになる。有名な市民がたくさんいることが戦略である。三鷹もほとんど住宅地しかなく、産業をつくりきれない場ではないが、ひとつは市民を有名にして市民に稼いでもらう、行政の周辺にある課題解決をするコミュニティビジネスの分野で有名になっていただくという戦略と、もうひとつはSOHOということで思い切って企業委託という戦略である。多摩地域では企業誘致は難しいので、内発的にそれぞれの方が自分で動くということ、それを徹底してやっている。多摩地域の住宅都市ではほかにやりようがない。</p> <p>「子育てねっと」も最初は3台のパソコンを用意しただけであった。問題はパソコンの有無ではなく、彼女たちが情報発信できるステージを市が提供したかどうかである。</p> <p>小平には、「こだいらネット」という地域密着型ポータルサイトがある。小金井や国立などにも同じ系列のものがあるようだが、これは商工会が中心になってやっていて、レポーターも大勢いて、企業が自分でサイトを作りたければ作れる。市民団体のページもあり、市民レポーターに頼んで情報を載せてもらうこともできる。それから、毎月「こだいら探検隊」としてお店や市民団体などいろいろなところに行って、取材して記事としてまとめるというのがある。市民が自由にやっていて、商工会の検閲があるわけでもなく、トラブルは今までそんなにない。</p> <p>若い母親が育っていく上で、母親たちは子育てをしながらも社会とつながりたいという意識がすごくあり、子どもの手を引きながらお店に行くと店主と話が弾んだりといった出会いが、とても新鮮なタッチで記事になり、記事もいきいきしているし、閲覧数も多い。もう少しページが増えていって情報が充実していくと、農家の情報やJAの情報も載せてという形で、可能性があると思う。</p>
---------------	--

<p>関7トバヱ-</p>	<p>もうひとつは、市のホームページとは別に、市の産業振興課が事務局をしている「グリーンロード推進協議会」のホームページを立ち上げており、私はそれに携わっている。市のホームページはかっちりした形で、写真もそれほど載せられないとか制約があるが、協議会のホームページは割合フリーである。</p>
<p>馬場7トバヱ-</p>	<p>市民の自由な活動と、行政の戦略的な取り組みの両者がかみ合うとよいと思う。</p>
<p>馬場7トバヱ-</p>	<p>市のホームページから、「グリーンロード推進協議会」のホームページにリンクは張っている。市が責任を持って市としてやるのがよいのか、市民の視点でやって、うまくリンクを張った形にするのがよいのか。というのは、これからもっと情報を拡大していきたいと思っていて、協議会のホームページには今「JA東京むさしの共同直売所」の情報も載せているが、これは市内に1つしかないの、これから個人の直売所も取材に行って載せていきたい。また、これからできるであろう小平の特産品も載せたいし、先ほど話が出たうどん屋の情報も載せたいというときに、商店もいろいろあるようで、うどん屋全部を載せろということにもなりかねないが、やはりおいしいところを載せたい。市はある程度公平性を持たねばならないところがあり、団体の判断でやっているほうが自由度がある。協働というところに入っていくと思うが、ありがたを考えていけるとよいと思っている。ネットは怖いくらい見られていると思う。これからは動画も入れていかなければいけないし、大事なツールである。</p>
<p>関7トバヱ-</p>	<p>若い母親たちの発想を地域に出していくと、思わぬ効果が出てくるし、普段気づかないようなことも気づいてくる。地域の資源を見つけ出してくれると思う。</p>
<p>馬場7トバヱ-</p>	<p>クチコミ情報というのがよくあるが、つい見ってしまうものである。市民が小平市を売る、行政ではなく市民目線で、ちょっとくだけたような言葉で、若いお母さんたちなどに記事を書いてもらうことにより、親近感がわく。</p>
<p>関7トバヱ-</p>	<p>チャットのような、すぐに返事がくるものも面白い。 また、自治体が税金で何かを作って終わりではなく、そこに発生する著作権を二次展開していくことも、これから行政は考えていくべきである。例えば三鷹市は、新しい「Ruby」というオープンソースのコンピューター言語で</p>

	<p>図書館用システムをみずから開発し、これを塩尻市に売った。自分のところの課題解決は、他の自治体にも活かせるツールになる。</p> <p>自治体は、これから発想を転換してみずから稼ぐというところが、地方分権の大きな足がかりになる。これなくして自立はありえない。少子高齢化で人口が減り、市民税の担税者や固定資産税の資産価値が減って税収が下がったときに、一方で行政需要は増える。高齢化で福祉、民生費がかなり増え、戦後造った都市施設の建て替えや維持費も大きい。行政はスリム化だけではなく、みずからパイを増やす産業政策をしっかりとやらないといけない時代になっている。地域再生ということで、各自治体が挑戦をはじめている。</p> <p>ネットを見る人と見ない人がおり、小平市では産業振興課でいろいろなマップを作っていて、けっこう好評である。</p> <p>それから、先ほどもうどんの話が出たが、小平では、農地で小麦を作っているところはあまりないが、私たちの「菜の花プロジェクト」とは別に、小麦を作っているプロジェクトがある。週末に「小平ふるさと村」でうどんを売っていて園内の民家で食べることができ、非常に人気があるが、そのプロジェクトが作った小麦を「武蔵野手打うどん保存普及会」に売って、その会がうどんを打って「ふるさと村」で売っている。先日の「灯りまつり」のときも、まつりの時間にあわせて売っていたが、すごい人気だった。この近くでは東久留米の柳窪の小麦が有名だが、小平も小麦なので、もう1回復活してうまく売れないかと思う。第2、第3の「菜の花プロジェクト」のようなものができるとういなと思っていて、なかなか農地が確保できないが、地域活性化に役立てていくのがよいなと思う。</p> <p>ブランドをつくるということもよいが、もともとあるものの復活ということもよいのではないか。昔には戻れないが、まだそれほど高いマンションもなく、「ふるさと村」があって、都心から30分くらいのところでこういう環境があるということで、風景を売ると同時に、訪れた人がお金を落とすような仕組みをつくっていく——近くには直売所もあって、道の駅というのはいくらでも、ファーマーズマーケットみたいなものがあちこちにあって、農家の人と交流できると、農家も元気になっていくのではないか。</p>
<p>粕谷トバイザ-</p>	<p>全体をいきなり整えるのはなかなか難しいだろうが、「菜の花プロジェクト」のように、土地が、経済的には採算ベースにまでは乗らないとしても、活用されているということは大事である。今、草さえ生やさなければよいというふうに農地が扱われている状況があり、市内に農地が200ヘクタールあるとしても、私などが見るとその半分くらいは農地として積極的に使われて</p>

	<p>いない。小麦なら小麦をそこに作付けできれば、かなりの生産量になる。採算ベースということでは別の手当ては必要かもしれないが、農地が活用されていることで考えれば、活性化の要素はかなりある。ちょっと動き出せば、それが起爆剤になっていくので、動くことが必要ではないか。菜の花も、景観が変わるだけでなく、人の気持ちも動き出す。あいている農地を1つの作物で動き出させる、それは大事なことだと思う。体験農園もそうだが、意欲のある人、使命感や志を持った人が市内に出て行き、そういう農地に参加して携わってくれば動き出す要素になる。やってみることが大事で面白い発想であるという気がする。</p>
<p>市長</p>	<p>私の家の近くにも市民菜園があって、見ているとこんなに皆農業をやりたいのかと思う。そういう需要はあると思う。</p> <p>馬場アドバイザーが、なかなか農地が確保できないと言っていたが、その理由はどのようなことか。</p>
<p>馬場アドバイザー</p>	<p>農家は、土地に他人が入ってくることには不安がある。市民団体と農家の直話し合いでは不安かもしれないが、「菜の花プロジェクト」は市が入っているということで、不安を払拭できる。もっと周知されるようになって、うまくいきそうだとすることで浸透していけばと思うが、まだなかなかそこまで周知されていない。</p> <p>それから、普通に売っている外国産の菜種油は、色も香りもなく、油の自給率は非常に低い状況があるが、実際に手絞りで菜種油をとってみると、色が濃くてオリーブオイルのようで、そのままドレッシングにもできるとてもおいしい油である。うまく生産すれば商品になるのではないかと考えており、売りたいとの話もあるが、今は収量がなくてちょっと難しい。もっと広い畑でできるようになればかなり有望だと思っており、油の自給率アップにも貢献するし、これはぜひ皆さんに味わってほしいものである。</p>
<p>粕谷アドバイザー</p>	<p>農地の貸し借りについて、農家はなかなか抵抗を持っているので、そこを行政が間に入って安心だということになれば、貸す農家も出てくると思う。経済的・採算的にも今の状態よりもよいということになれば、やってみようかということになるのではないか。農地の貸し借りには農家は不安が大きいため、その不安要素を取り除く必要がある。</p>
<p>関アドバイザー</p>	<p>自治体は安心弁である。例えば三者協定とか、農業委員会とか、自治体の役割として市民と農業者の間に入れば、自治体は信頼度があるので、動き出</p>

	<p>せばすごくよい広がりになる。</p> <p>ハチミツも自給率が大変低い、「銀座ミツバチプロジェクト」という銀座のビルの屋上でミツバチを飼っている取り組みもある。都心部は都市公園がありそこに働きバチが蜜を取りに行く、労働集約型のよい産業と言われている。</p>
<p>粕谷アドバイザー</p>	<p>菜の花だけでハチミツをとれたら、それもひとつのブランドになる。</p>
<p>関アドバイザー</p>	<p>よいものができれば、市内で売るだけでなく、都心部でも十分買ってもらえる。産地と消費をきちんとつなぐことも重要である。</p> <p>最後に、今日は意見出しなので、特にまとめるということではないが、今日聞いていて次の5つの大きい柱が出てきたように思う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 地域の資源を見つけていこう、新しいものというよりも歴史や文化、景観に基づいた、足もとをしっかりと見ていこう 2 発想の転換をしていこう、ものの見方を変えていこう、それによって見えなかったものが見えてくるのではないか 3 農・商・工の連携をしよう、農地も農業者だけでやるのではなく、農地というベースを使って連携すれば、地域経済が回ることになる 4 ITを使うとか、メールやクチコミなど情報発信をしっかりとしていこう 5 動いてみることにより、伝わるものに重みが出たり、人に勇気を与えたりする、次の人材もはぐくまれてくる <p>今回はこの5つの柱が立ったので、次回は、小平をどう売り出すか盛り上げるかの戦略、どのような手法がよいかという話をしていきたい。こういう手法がよいのではないかという具体的などころ、事業手法などをうかがいたいと思う。</p>
<p>市長</p>	<p>アドバイザーの皆さんは、実際に現場で活動している方なので、話に説得力があり、大変参考になった。</p>
<p>関アドバイザー</p>	<p>アドバイザー会議が提案で終わるのではなく、ここで事業ができあがってくると面白い。ひとつのモデルができると、小平の魅力がはっきり見えてくると思う。</p>

(文責：事務局)

平成 21 年度第 2 回小平市市政アドバイザー会議要旨

開催日時	平成 21 年 11 月 12 日（木）15 時 00 分から 17 時 00 分まで
開催場所	小平市役所 5 階 504 会議室
出席者	小林 正則 市長 粕谷 英雄アドバイザー（農業体験ファーム「みのり村」農園主） 関 幸子アドバイザー（NPO 法人 地域産業おこしに燃える人の会 理事長） 馬場 悦子アドバイザー（NPO 法人 小平・環境の会 理事長） （事務局）伊藤企画政策部長、有川政策課長、篠宮政策課長補佐、相澤主査 （傍聴者なし）
会議次第	1. 開会 2. アドバイザーからの問題提起、意見交換 3. 閉会
市長	<p>8 月に開催した 1 回目のアドバイザー会議では、小平のまちの活性化の可能性や方向性について、ご議論、ご意見をいただいた。</p> <p>本日、第 2 回の会議では、前回の総論的なお話を踏まえ、各論的なお話をいただく形で、小平をどうイメージアップ、魅力アップをしていくかや、小平の PR ポイントとして考えられるものは何か、また、効果的な広報戦略や、発信の手法などが、論点として考えられるかと思っている。</p>
関アドバイザー	<p>前回は、小平の持っている多様な資源というものを、自分の体験などを通して、いろいろな可能性があることを提案し、確認した形だろうと思う。今日は 2 回目ということで、ブランドイメージ、魅力アップというざっくりとした大きな題をもらっているが、大きい題であるためなかなか切り口が難しいだろうと思い、「丸の内と地域ブランド」についての資料を持ってきた。</p> <p>丸の内は、昔はオフィス街であったが、最近では銀座ではなくてわざわざ丸の内にも買い物に行く、東京駅まで食事に行こうというところまで、地域の企業がコンソーシアムを作り、大丸有（だいまるゆう）——大手町・丸の内・有楽町——の協議会を作って、長い歴史を持って協議をしてきて、それぞれの企業体を持っている所有地を、建て替えの時に 1、2 階は店舗にし、上にオフィスビルを入れようということで大きい約束を作り、15 年くらいにわたって建て替えの時にそろえるという誘導型のまちづくりをしてきている。参考にさせていただきながら、切り口を少し鮮明にして、議論をいただければと思う。</p> <p>資料にある「地域ブランドマネジメント」（電通アビック・プロジェクト編、有斐閣）という本の引用になるが、「買いたい」「住みたい」「訪れたい」</p>

<p>粕谷トバイザ</p> <p>関トバイザ</p>	<p>「交流したい」というものを誘発することが、地域のブランドをつくるということである。前回、小平によいものがあるという切り出しをしたので、それをカテゴリに分けながら、どのように積み重ねていくか——積み重ねてみたら資源が足りないという分野も出てくると思うので、その分野を足していこう、もしくはその分野は使わなくてもそれ以外のカテゴリで魅力を発信できれば、全部を足さなくてもよい。これしかない、オンリーワンしかない町でも、まさにそれがブランドになっているので、逆に言うと全部を足して平均にすることがよいかどうかという議論もまたある。</p> <p>「住みたい」というところは、小平は既に十分持っているが、情報発信がまだ弱いので、住みやすさというものが多摩地域で競われている中では、まだ小平市という名前がぱっと浮かぶほどには、住みやすさの充実感が情報発信できていないのかなという思いもある。</p> <p>「買いたい」「住みたい」「訪れたい」「交流したい」という定義の中で、こんなところが小平にはあるんだというところを挙げていただければと思う。まず「買いたい」、小平ならではの買い物ができるというところを、皆さんから意見を聞く形で始めたい。</p> <p>私は農業者なので、農業者の角度から農業を見るのだが、小平市は庭先販売が非常に増え、直売が有利であった時代から、今は過当競争になっており、品揃えが悪いところは競争力を失っていく。もともとは片手間にやっていたところがあって、無人販売という形で展開していたが、無人販売はお客様を相手にするのに失礼な部分もあり、またお互いの信頼関係で成り立つが、信頼関係にもひびが入るような状況も生まれてきた。必ずしも直販が有利な時代は過ぎたのではないか。しかし有人にするとコストがかかり、直販は簡単にはできるが、成立させるのは難しい時代になってきている。これから先、市民との接点としては庭先販売の小売はよいが、限度が見えてきたのかなとも感じている。</p> <p>私としては、提案したいいくつかの形があり、今日実物を持ってきたのだが、これは今実際に稼働させているもので、野菜のクーポン券である。直売は、季節により品揃えが違うので、お客さんにそれを先取りして紹介できるし、ギフトにも使ってほしい、そんな形で、品目が少ないとちょっと難しいかもしれないが、何園かの共同でやれば品物も増えてくると思うし、これからの一つの展開かなと思う。</p> <p>お客様の囲い込みの手段にもなる。</p>
----------------------------	---

<p>粕谷アトバイザ-</p>	<p>非常に反響もよいので、ただの直販だけではない形を考えていきたい。今日、用があって世田谷に足を運んだが、いろいろな地域の状況を見ても、直接農家から買うということが浸透してきている。その中でも特徴のあるところが、人気がある。価格はどこに行ってもそれほど変わらないので、多品目、鮮度、安心度、それからクーポン券のような形で、お得感や、これから先どんなものが採れるのかということを取先取りしていくことができるので、ひとつの提案の仕方かと思っており、逆にみなさんの意見をお聞きしたいくらいに思っている。</p>
<p>関アトバイザ-</p>	<p>農協は直販をしているか。</p>
<p>粕谷アトバイザ-</p>	<p>本店でしている。</p>
<p>関アトバイザ-</p>	<p>道の駅は、東京にはほとんどないが、小平にはあるのか。</p>
<p>粕谷アトバイザ-</p>	<p>小平で庭先販売が普及したのは、早くから始まったということもあるが、大型店ができなかったので、個々の農家が努力する形が生まれた。大型店舗が作られると影響が大きく、農家が自分のところで店を開こうという意欲もなくなり、工夫ができなくなってしまうと思う。</p>
<p>関アトバイザ-</p>	<p>道の駅というのはドライブインで、最近では農家の皆さんが、庭先だけでなく持ち寄って、市外の客も取り込もうという動きがけっこう出ている。</p> <p>木更津で「枇杷倶楽部」というのをやっていて、ビワの加工品をエリアで戦略的に作り、道の駅という出口を作ってそれを市の第三セクターで運営し、地域の農家、果樹園の方と一緒に生産から加工・販売まで一貫して地域で行い、その地域でビワといったら枇杷倶楽部というのが代名詞のようになっているという事例がある。</p> <p>農業も、庭先という個々の農業者が持っている資源が、地域の顔の見える範囲には展開されているが、小平のブランドの強みを発揮するには、もう少し大きく、もしくは複合化し連携して展開し、市外の客を取り込む。小平から西のほうはまだ畑が多くあるが、東はどんどん農地が減ってきており、買えるものがあるなら買いに来たいということがある。</p> <p>あとは、思い切って最近ではレストラン——フードマイレージといって、遠くから運ぶとCO₂がかかるので、なるべく鮮度がよくて朝どりで、有機農法のものを、近くから買いたいという大手レストランもけっこうあり、みんなでまとまって売りに行くのもよいと思う。都心のレストランはそれを欲</p>

馬場アドバイザー

しがっているが、それをマッチングする人が、今はいない。

市民に対するアピールから、もう少し戦略的に、外の人にも買ってもらう、それと同時に小平の強みのある農産物を高く買ってもらう仕組み、ちょっとしたマネジメントがあると、小平のブランド、イメージアップにつながるかもしれない。

粕谷アドバイザーのクーポン券は、野菜によって色分けされていてきれいで、すごくよいと思う。メッセージのカードにもなると思う。クーポン券に書いてある野菜がどんな野菜で、いつ頃店に並ぶかとか、食べ方とか、メッセージをつけると、プレゼントやちょっとしたお返しにもよい。地域通貨になると思う。循環をするから、使いようによっては小平の活性化にもなるし、市外の人に小平のグリーンロードを歩きに来てよ、と渡すこともでき、進化していけば面白いし、他の農家もやりたがるのではないかと思う。

いろいろな農家が集まって1か所で売るところが、市の中央にはJAの販売所があるが、東西にはない。東部にも農協はあるが、そこは小さいのでその前で売るのは難しいかもしれないが、常設のものができるとよいと思う。毎日ではないかもしれないが、国分寺駅の北口広場でよく野菜を売っていて、そうすると小平の人も、けっこうそこで買ってしまっているのではないかと思う。小平駅などでも、直売所ができるようなスペース、屋根付きのものなどを作って売ることができると、お墓参りの人などにもそのシーズンにはよい。花小金井駅も、スーパーの前で時々野菜を売っているが、もう少しそこをやれば、地産地消ももっと進むし、小平の野菜の自給率も上がるし、そういうことができないかなというのは、消費者の立場からずっと思っていた。

それから、普通の野菜はほかでも買えるというところがあるが、ちょっと変わった野菜だと、買ってみようという気になって、他の人にも紹介したり、また次の年もあれが食べたいということでリピーターになったりすると思う。今、江戸野菜というのがはやっていて、小金井市のほうで一生懸命やっているようである。それから小平にはうどがあるし、例えばお化けきのこみたいな大きなしいたげとか、ちょっと目先の変ったものが並べてあると、消費者は遠くからでも買いに来ることにつながると思う。農家に、小平産野菜のPR、売出しをしてほしい。

前回の会議で思ったのは、農地を残したいけれども、農家の立場からそれは厳しいというところがある。市は、農業基本構想を作ってやっているが、農地を確保する、残すには、もう1歩進んだことをしていかないと、次々に宅地化されていき、農地がなくなるのも時間の問題ではないかという気がす

	<p>る。第1回の会議で粕谷アドバイザーが言っていた農業公園は、体験もできるし、もぎとりもできるし、買い物もできる。そういうレジャー的・テーマパーク的な農業公園が、場所は例えばふれあい下水道館の近くでもよいし、ふるさと村のような古い民家のあるところに農地が付いていて農業公園になっている例もあるらしい。近くの農家と提携して、ふるさと村に行った後に寄れるような、誘導できるような農地があって、そこは残していけるようなことができるよいのではないかと思った。そうするとそこで、「買いたい」もできるし、「訪れたい」もあるし、体験も交流も遊びもできるし、粕谷アドバイザーの提案が実行できたらよいなと思っている。農業公園は、足立区にはあるようだが、多摩地域にはないので、多摩地域で最初に小平にできるとよいのではないか。農家だけでなく、応援団・ボランティアを募って、案内したり、収穫した野菜をサラダや煮物で食べられたりとか、ちゃんとしたメニューでなくてもよいので、味見できるような工夫があって、そこでお金を落としてもらえそうなものがあればよいなと思う。</p>
<p>関アドバイザー</p>	<p>農地の存続は、一自治体ではなかなか制度的に難しい。相続のときに等分されてしまったり、なかなか自治体がいり上げることも難しい。</p>
<p>市長</p>	<p>基本的には個人の財産であり、行政が買うのも難しい状況である。市の農地を守るために、市がすべて買い上げることはできない。将来小平がどういう市を目指すのかというときに、現在の農地をすべて維持することは難しい現実がある。市として覚悟して一定程度残す必要はあると思うが、小平あたりはちょうど都心と郊外の境界——新宿から30分の通勤圏で、郊外の牧歌的な武蔵野の原風景もやや残す、ちょうど境界だと思う。それをどう乗り越え、魅力あるまちにしていくかというときには、線引きが必要である。ブルーベリーがあつたり、新鮮な野菜を供給できる状況があつたりするので、行政にも農家にも覚悟が必要だと思うし、線引きも必要になってくると思う。</p>
<p>関アドバイザー</p>	<p>行政が動かなくても、農業者のほうの覚悟で、続けようという農家とそうでないところが明確になりつつある。行政は一生懸命やろうという農業者を、しっかり応援していくことが重要になってくる。</p>
<p>市長</p>	<p>今まで、行政はどうしても公平公正を旨にとということで、農業者支援というとあまねく行って、結果的に中途半端になってしまっている。やる気のある農業者からは、この程度の支援で何ができるのかということになるし、そうでない農家だと、制度が活かされないということになり、双方から不満が</p>

<p>馬場アドバイザー</p>	<p>残る。市としては、将来にわたって農業を続けていくという覚悟を持った人を中心に、しっかり支えていくことも大事だと思う。</p> <p>世田谷の農家などとも話したことがあるが、その人たちはやはり覚悟を決めている。世田谷あたりで農家をやるというのは半端なことではない。今は選択ができる時代なので、農業を事業として選択する覚悟が必要である。やる気のある人が農業をできるような仕組みに、制度を変えることが必要である。小平市の農業を守るには、農家の事業者としての覚悟と、それとは別に、自分は農業はしないが農地として残したいということならば、農業を他に託すという選択肢もある、そういう覚悟をしてもらいながら、小平市の将来のまちづくりがある程度描けるのだと思う。</p> <p>市民は、農業をやりたい、野菜を作りたい、関わりたい、また農地は残ってほしいという思いを持っている。粕谷アドバイザーの体験農園の受講者は、まるで粕谷アドバイザーの家族になったかのように直売店舗で野菜を売っていたりするが、それは、野菜を作って、なおかつそのおいしさを皆に食べてもらいたいということで、自発的にやっている。やりたいということがあると、人は動くものだと思う。市内には体験農園が全部で3つあるが、天神町にある「畑のおじさん」という体験農園の受講者が、自費出版で本を書いた。それを読むと、その方はサラリーマンで、大学院の夜学で緑を残していくというようなことを学んで、自分も何かしようかというところで、家の近くで体験農園の募集があり、熱心にやっている。出勤前に野菜を収穫したり、一年が野菜の栽培を中心に回っているようで、常に頭の隅で畑や野菜のことを考えている。そういう農業をやりたい、土に触れたい層はたくさんいる。体験農園がもうちょっと広がっていくとよいと思う。それをうまく取り込んで、やる気ある農家を残せるとよいと思う。</p>
<p>粕谷アドバイザー</p>	<p>プランを立てて、中長期的に人を養成していくことも大事である。セミナーのようなものを作ってもよいのかもしれない。</p>
<p>関アドバイザー</p>	<p>農家に対して、体験農園の経営の継続可能性を見せていくことも必要だろう。</p>
<p>粕谷アドバイザー</p>	<p>経営者側の、体験農園などを開設するための勉強会を開いてもよいかもしれない。5年先・10年先を目指してもよいし、そこでは実現しなくとも、別の角度からものを見る力がついたりする。</p>

<p>関アトバヱ-</p>	<p>小平市の位置というのが難しいところで、小平が持っているものは、周辺もみな持っている。だとすると、小平をイメージアップさせていく、ブランドをつくるというときに、同じ都市農業といっても、ちょっと切り口を変えるとか、違う発信のしかたをしないと、東村山や国立、立川とどこが違うのかということになる。多摩地域の農業として同じになってしまう。</p> <p>農業を核にするとすれば、小平の強みは、農業の中で何なのか、発信できる核をとりあえず決めてやってみる。やってみてそれがだめなら、次に行けばよい。ただ何もせずに都市農業と言いつけても、それはなかなかブランドにならない。先ほどの「枇杷倶楽部」ではほかをほとんどやらず、ビワだけに特化している。小平は市長が言われたとおり、ベッドタウンとして人口が増えていくところといわゆるローカルのちょうど結節点なので、都心もローカルも持っている、面白みもあるが経営としては非常に難しい。その中で、まず柱として農業、切り口としては人材育成、都市型農業の人づくりというところは面白みがあるかもしれない。農業高校は小平にはないのか。</p>
<p>粕谷アトバヱ-</p>	<p>農業高校は府中にあるが、必ずしも農業を志す者が来ているというわけではなく、目標を持って来ているのは少数派である。農業高校の施設と機能を活用してタイアップできるとよいが、機能面を借りるにしても学校は生徒指導などに手いっぱい余裕がないのが実態で、難しい状況である。</p> <p>どこを刺激したり、育てたりすればよいか——全体の底上げという考え方は、この厳しい状況では難しいと思う。意識を持てるほど、皆が農業に魅力を見出せるとは限らない。やはり意欲のある人間を後押しして、育てたほうがよい。農業基本構想でも、認定農業者の目標人数を出しているが、なかなか届かない。農地が 200 ヘクタール、農家 400 軒といっても、1 世代経てば減ってしまうと思う。どこかでとどまるところが出てくるとは思うが、そのときの農業者が、小平市でどんな形態で農業経営をするのが望ましいか、市のあり方・生活のあり方としてもどんな形が望ましいか、農業者に対し、10 年先の指導者を養成する勉強会を組んでいくことが必要ではないか。お金はそれほど使わずとも、人材育成に投資していく、育った人間が次のアイデアを出していく、そういう引き金になるような勉強会の場を、系統立てて 1 年間なら 1 年間の講座にして、いろいろなところから講師を呼んで、発想力を身につけるような講座が必要ではないか。</p>
<p>関アトバヱ-</p>	<p>地域が活性化するためには人材が必要だが、一番最初の人材の母集団が 5 人いると、相当早い時間で活性化するという。この母集団を、誰をコアにしてきちっとつくるか、市民の中から母集団になる方の束ねを早めにするとい</p>

市長	<p>うことは、農業に関しては配慮を持った方も多いので、やれるのではないかなと思う。馬場アドバイザーのような、農家ではない外からの応援団、消費者としての応援団の目もあるので、そういった母集団を束ねて、農業というブランドの柱にさせていただけるとよいのではないか。</p> <p>この土日で、私は三重県の多気町に行くのだが、そこの調理師免許を取れる高校の生徒たちが経営している「まごの店」というレストランを見に行く。高校生たちが調理師免許を取るだけでなく、土日全部をかけて、地域の食材を使って1日 250食、昼間だけやるというレストランで、全国から人が来る。</p> <p>人づくりはしました、体験農園があります、でもそれが、やはり食材なのでおいしいかどうかを確認できる場所として、小平にレストラン、もしくは実験店舗があるとよいのではないか。農業をブランドの柱にするならば、農業公園のように大きくなくてもよいので、個人でやっている店でもよいし、農家の方が皆で田舎料理を出してもよいし、古民家を借りられるようであれば、市民が農業者から買い上げた食材で——今、地方で農家レストランがけっこうはやっているが、腕に自信のあるお母様が、普通の家庭料理としてレストランをやっても、これはまさに特に市民の成熟を目指す小平市としたら、面白いのではないかなと思う。鮮度のよいおいしい野菜を食べられるまちであってほしい、わざわざ農業公園まで作らなくても、まちの中にレストランが点在して、まち全体が農業公園というようなイメージが小平市にふさわしいのではないかなという気がする。わざわざ作るのではなく、まち全体に散らばって、まち全体が農業公園という出し方もひとつあるのではないか。</p> <p>小平市は、北側に西武新宿線が走り、南側に中央線が走り、大きな駅はないが小さな駅がいっぱいある。これをプラスにとらえると、西武線と中央線の真ん中に位置して、歓楽街のような集客をする施設はないが、これは意識的なものではなく、結果として開発の手から逃れ、残ったものだと思う。そうであれば、将来にわたっても残せばよいと最近考えている。人口減少社会・高齢社会ということを考えると、これから、日本がかつてのような開発ラッシュに見舞われるということは、基本的にはないだろうから、この先も大きな開発はないと思う。どういう社会を目指すかというときに、小平が開発の手から逃れられたということを考えると、ゆったりとした、犯罪も少ないまちであるということをしかり位置づけて、集客のまちではないということを決めて、ということに耐えられるかどうか。人がたくさん来る歓楽街などはないが、そのかわり農地や公園があつて暮らすにはよいまちだという、そういう選択が一番自然で、少ない投資でできるのではないかなと思</p>
----	---

<p>関アトバヱ-</p>	<p>う。</p> <p>ハレとケでいえば、ある意味で日常が充実している、平日が安定したまちにするというのは、生活の本物ができるとのことだと思ふ。そのためには、ちょっとした散りばめられた魅力がないといけな。派手さはないが、本物の魅力がほしい。それには食とか、農業体験とか、ゆっくりとした本質的なものを、長年かけて着実にゆっくりやれたら、小平は本当に成熟した地域になると思ふ。</p>
<p>市長</p>	<p>たとえば犯罪が日本一少ない市とか、そういったことがあってよいと思ふ。それには努力しなければならないが、安心して暮らせるまちで、そこに公園や農地があればよいと思ふ。</p>
<p>関アトバヱ-</p>	<p>そのためには市民にも覚悟が必要で、市民参加で議論してもらい、市の方向性を、時間をかけて確認していただければよいと思ふ。そういう方向性を、地域にアピールをしていく、小平のブランドとして、安心・安全や、生活の充実があるということをしっかり伝えていくこと、「普通」が一番幸せだというようなことがブランド力ということになる。</p>
<p>馬場アトバヱ-</p>	<p>小平市には、そういう人が、もうすでに住んでいるのではないかと思ふ。都心から帰ってくると、小平は高い建物がなく、夏などは星が見えてさわやかな夜風が気持ちよく、グリーンロードをちょっと歩きながら帰れる。これはなかなか得られない価値だと思ふ。</p> <p>お金のことで言えば、小平駅の前に巨大な丸ポストができたが、それは市が作ったのではなく、商業関係者が、小平は丸ポストのまちだからということで自発的に丸ポストの会を作り、巨大な丸ポストを作ろうということになって、市と調整してあの場所に設置したと聞いている。それは、普通のポストの2倍くらいの巨大なもので、人を呼ぶような話題性のあるものである。何百万円か費用がかかって、何人かで作ったそうだが、それは私財を投じ、また寄附を募った。そのあとカレンダーも作ったという。</p> <p>そのようにどんどん発展して、発案をして自分でやり、いろいろな人に助けてもらいながら、市のお金を使うのではなく——内山節という哲学者が「温かいお金」「冷たいお金」ということを書いているのだが、冷たいお金というのは顔の見えないただのお金だが、温かいお金は人の気持ちが入っているお金で、巨大丸ポストのために寄附をした人たちは多分、ポストを作るにはお金がかかっているし、ポストがそこにあることで自分も楽しくなると</p>

関アトバイザ-

か、そういうことに対して敬意を払って「気持ち」を出したのだと思う。

地域でそういうお金の回り方があれば、同じお金を使っても、気持ちを通わせるようなお金が回ることで、より豊かに人と交流を持ちながら暮らせるのではないか。そういうことがふっと感じられるようなところがまちの随所であれば、犯罪も多分少なくなるだろうし、人の関係ももうちょっと密になって、温かいまちになるのではないかと思う。

事例として、丸ポストのような、自分のやりたいことは、市には頼らないけれども自分でお金を出してやるという市民が出てきたというのは、成熟の一つの現われかと思う。

NPO法ができて、市民同士が組織を作ることでもできるようになったし、市民ファンドといって、どうせお金を出すのなら地域で、顔の見える関係の中でお金を使う——これはローカルファーストという考え方だが、地域で循環する経済をつくろうというところに、日本はこれから動いていくと思う。そのためには、次につなげるだけの原資が獲得できる、小さいけれども産業・経済にしていく必要があると思う。

農業には、もともと小平市は強みもあるし、お金はかけずとも、大きい工場はできなくても、例えばジャムの加工場などは1室でもよい。岐阜県の明宝村（現・郡上市明宝）は人口約2千の村で第三セクターを5つ作ったが、どれも成功した。成功した理由は、小さいけれどもしっかりやろうということで、形の悪いくずトマトをトマトケチャップにしたが、今はそのほうが付加価値が高くて売れるので、今では生では出荷せずトマトケチャップにして、明宝村の作付だけでは足りずに、他の村にもお願いしてトマトを作ってもらっている。最初はいくずトマトがもったいないからということでトマトケチャップに加工したのが、産業になっている。村が工場を建てて初期投資はしたが、最終的には女性だけでやっている「株式会社明宝レディース」という会社が、20年くらいで村に返済していく。ケチャップは全部手作りで、瓶詰めも、ふたをかけて輪ゴムをするのもすべて手作業である。

そのようなマイクロビジネス的な小さな雇用は、小平市に向いているのではないか。ためしに少しずつやると、参加もできるし、一定の収入も得られるし、商品のファンもできる。1つでもよいから回していく小さな仕事、事業を、産業としておこしていくと、市民も面白いし、訪れる方にアピールする「あんこ」ができる。「あんこ」が見えてくると、ブランド力になるし、小平のイメージアップにもなる。

もしくは、粕谷アドバイザーのような「人」を売り出していく、たとえば、小平といたら粕谷さんと言われるくらいにすると面白いと思う。

<p>粕谷アトバイザ-</p>	<p>加工品は、関わる人が多く手間がかかるが、もうかるからといって合理化してはだめである。手間をかけることが一つの差別化になる。</p>
<p>関アトバイザ-</p>	<p>地域の雇用を兼ねている。機械でやれば簡単だが、手作業でやる。</p>
<p>粕谷アトバイザ-</p>	<p>私の家の売り上げのうち、ジャムがけっこう大きく占めており、農協の直売所に出しても、ジャムの売り上げが一番である。そこには多くの人が携わってくれて、毎日一なべ作るのに3時間かき回しているが、「みのり村」の会員たちは、楽しみでジャム作りに関わっている。私のところでは、スモモジャムを600本近く、スモモは酸味もあり、種が一つなので種を取り出しやすく色もきれいなので、作っている。</p> <p>加工品の付加価値は大分認めてもらえるようになってきて、皆さんそれを目当てに来ているくらいなので、加工品や加工施設を作るのに何らかの後押しができるとうい。</p> <p>それから人材については、私が若い頃には、青年団体などがリーダー養成とかいろいろな勉強会を主催していたが、最近リーダー養成講座のようなものもなかなかないし、技術的な講習会も単発的なものはあるが、継続的なものがあまりなく、自信を持った人が育ってこない。もっとその辺を満たしてあげたいという気はする。農協がやれるとういのだが、なかなかそういった先行的な投資がされていない。ぜひ若い人たちには、5年、10年先につながるような人材養成をできたらよいなという気がする。</p>
<p>関アトバイザ-</p>	<p>農業を離れてそれ以外のところで、「買いたい」とか「交流したい」とかの種になりそうなものは、小平の中であるだろうか。</p>
<p>馬場アトバイザ-</p>	<p>農業と関連するが、やはりグリーンロードをいかに売り出すかということかなと思う。先ほどの農業公園というのが難しいのであれば、グリーンロードが21キロメートル市の周囲をめぐっていて、そこにいろいろなものが点在している。農業公園と同じ体験ができるようなコースを作るとか、駅がたくさんあるというメリットを活かして、グリーンロードはどこからでも行けるので、例えばどこの駅から行くコースとか、食のコースとか農業体験のコースとかいろいろ作ると、飽きずにいろいろなところに何回も来てもらえるかなと思う。</p> <p>加工品も、農家の方で最近漬物をやっていて、大根のブルーベリー漬けみたいなものがあるてすごくきれいな色が出ている。いっぱい採れて売れ残っ</p>

<p>粕谷アトバイザ-</p>	<p>たりして無駄になってしまう野菜などを漬物にすると、また加工品として商品になる。加工品を、ここではこれが買えるとか、それぞれの農家の得意なものを買ってもらえるような形にして、もし農家が大変であれば、商業の人も関わって——国分寺などではブルーベリーの加工品を商工会の女性部が作っているが、そういう商業のほうとも連携しながら、農家レストランも、農家は野菜を作るのに大変だったら、商業のほうにレストランはやってもらうとか、うまく分散してやっていったらと思う。</p> <p>一人で全部やるには限界がある。レストランだと、練馬の白石農園という体験農園では、一角にレストランを作り、レストランを運営したいという人と一緒に、畑で採れた食材を使うということでやっているが、非常に魅力があると思う。私も今、ケーキ屋の「かしの木」で、10月からウコッケイの卵を使って「うこっけいプリン」として売り出してもらっている。</p>
<p>関アトバイザ-</p>	<p>野菜ケーキとかもよいのではないか。</p>
<p>市長</p>	<p>コミュニティビジネス、地域ビジネスとして、地域の中で消費していれば、100個しか作れなければ100個でよいし、全国展開までする必要はないと思う。大もうけはしないが、事業として成り立つ、そういうビジネスを市が後押ししていく。それは皆が関わる生きがいの場であるし、地域に貢献する充実感、居場所と生きがいをつくることができる。</p> <p>人づくりをしていけば、自然とそうなると思う。「菜の花プロジェクト」も大きくなってきたが、仲間づくりをしていくと段々広がっていく。一人で背負っては負担になるので、仲間をつくってそれぞれの地域で、「菜の花プロジェクト」のようなよい例を広げていけると理想的である。</p>
<p>関アトバイザ-</p>	<p>全国発信は無理でも、いくつかの事例で活躍している方にスポットを当てていただいて、お知らせ・PRをすると、それに続く事例が出たりする。</p>
<p>市長</p>	<p>人づくりがベースであり、社会貢献の考え方がないと、また人と関係がつかれる人でないと、こういう事業はできない。</p>
<p>関アトバイザ-</p>	<p>コアになる母集団、人づくりが必要になる。</p> <p>先ほど市長がかなり明確な方針を出されたので、それを支える仕組みがあったほうがよいと思う。成熟した市民が豊かに住めるまちを目指すとなると、自治体としては、自然発生的にそういうものが出てくるのを待つのでは</p>

<p>馬場アドバイザー</p>	<p>なく、戦略を持って、それに流れていくための一定のエンジンが必要であると思う。エンジンの一つは市長であり、市役所の職員だが、事業を展開する上では、政策としての補助メニュー等であったりする。こういうものがあつたらよいというものがあれば、提案してほしいがどうか。</p> <p>先ほど市長が言われたのは、コミュニティビジネスのようなものが地域にいっぱいあれば、地域が豊かになって、コミュニティビジネスというのは、全国展開をするわけではなく地域密着型で、営利目的ではなく地域貢献型で、すごくお金をもうけなくてもよいし、地域と交流しながら、自分が満足しながら、という生き方、働き方だと思う。粕谷アドバイザーがされている事業もコミュニティビジネスの1つかなと思っている。</p> <p>さっき人材育成の話があつたが、小平市で「いきいき協働事業」という、地域の団体から提案した協働事業を、次年度に提案団体と市がいっしょに行う事業が、今年度募集があつて来年度から始まるが、もう少しそういう個人を支援できるような制度があるとよいと思う。</p> <p>市が起業のノウハウからアドバイスして、起業を成立させる、軌道に乗せていくものもあると、これから特に若い人にはよいのではないか。そういう例があると、小平はそういうところに手厚いという市の特色になっていく。小平は若者がいきいきと働いているとか、すごく突出したものはないが、新しい事業が生まれてユニークだとかそういうものが、市が支援しながら育ていくとよいと思う。市で専門家を頼んでもよいが、粕谷アドバイザーのような例もあるわけだし、そういう人を先生にして教えていくような形もよいのではないか。コミュニティレストランとか、クッキー屋さんとか探せばいろいろあると思うので、そういうところを発掘して、ノウハウを伝授していくようなものがあるとよいと思う。</p>
<p>関アドバイザー</p>	<p>先ほどスモモジャムの話があつたが、例えばジャムのビンの形を決めるとか、ラベルを作る時にデザイナーの力が欲しいとかいうときに、IT・パソコンを使うデザインの仕事などは若者に向いているから、そういうものもあわせていくと新旧同時に産業にもなるし、人材にもなっていく。</p> <p>例えばIT系の企業の人材リストとか——三鷹市の場合には、誰に聞いたらいいたという時の駆け込み寺として「まちづくり三鷹」という第三セクターを作り、小さなビジネスをおこしたい人たちが入れるインキュベーション施設を、政策として10年やってきたので、今200社を抱えている。そこにデザイナーがいるとか、ホームページを作るときにはすぐに教えてもらえるような人が近くにいるということで、次の展開に行きやすくなる、という部</p>

	<p>分でのマッチングになる。企業リストみたいなものや、居場所と電話番号がわかるだけでも、ITが苦手な方たちが彼らに聞きに行くことにより、そちら側にもビジネスが生まれる。</p> <p>どんなにマイクロビジネスであっても、連携は必要だと思うので、新しい産業の面も一緒に育てる、ここのところの掘りおこしはぜひしていただきたい。</p>
馬場アドバイザー	<p>そういう面では、武蔵野美術大学の学生などは、とても地域に貢献している。</p>
市長	<p>市内に、大学が6つ、高校も6つある。小平市は、学校もあるし農地もあるし工場もあるし、100点はないが赤点もなく平均値である。消去法で考えていくと、意外と小平市が選ばれる。</p>
馬場アドバイザー	<p>住んでいるとよさがわかる。武蔵野美術大学や津田塾大学の学生は、市内に多く住んでいるし、市内の社宅にいた人たちが、小平で家を買いたいと言っているのをけっこう聞く。</p>
関アドバイザー	<p>今日は市長からかなり方向性のある言葉があったが、それをベースにしながら、チャレンジしていくことも必要だと思う。住宅都市としての小平市の姿は、この先も変わるわけではないと思うが、今のような農業を中心としたアピールできる「種」と同時に、住んでよしというところをベースとすると、やはり景観とか、市長が言われる治安とか、あとは交通網・動線、交通計画とか、そういったものを行政が丁寧な施策としてやっていく、そういう当たり前のところを着実にやっていきながら、長い時間をかけて小平市を整備していただくことが、実質上小平市のブランド、イメージアップにつながるということだろうと思う。</p> <p>もうひとつはやはり、粕谷アドバイザーや馬場アドバイザーのような「市民」がいきいきとしていることを、もうちょっとPRしてもよいのではないかと思う。小平はちょっとイメージがぼんやりしている可能性がある。小平にはこういう人がいるという「人の顔」が見えてくると、明確な小平の姿が、分野ごとにでも見えてきて、小平の強みをさらに発揮できるのではないかと思う。そのあたりはやはりパブリシティなり、インターネットという新しい手法を使って、もっともっとPRしていくとよいと思う。全国からではないにしても、近隣から買いに来ていただいたり、問い合わせをいただいたりするには、需要をつくっていくことが必要なので、そんなところをぜひや</p>

<p>粕谷アドバイザー</p>	<p>っていただきたい。</p> <p>若い人を育て、若い人たちがこれからの知恵・力を出せるような環境づくり、きっかけをつくれるような取組がほしい。農業界でもそれ以外でも、セミナーや何かをテーマにしたコース、それから最近の若い人はなかなかリーダーになりたがらないので、若い人がリーダーシップを発揮できるようなリーダー養成とか、そういう刺激がほしい。なかなか目指して育つものでもなく、難しいかもしれないが、そこが一番取組として力をかけてほしいと思う。</p>
<p>馬場アドバイザー</p>	<p>学校などに行って、若い人たちに話をするのはどうだろうか。若者の職業選択として、例えば農家にはなれなくても、農家と消費者をつなぐような仕事を選ぶというチョイスもあると思う。農業が小平にあることは、基本としてよいなと思っていて、農業者がそういうことをアピールできるとよい。</p>
<p>関アドバイザー</p>	<p>今回は2回目で、市長が基本的な方向を示されたように、落ち着いた安心・安全に暮らせるまちをベースとしながら、市民がいきいきと活動できるということが小平の最大のブランドだし、イメージアップにつながるということを確認したいと思う。そのために大切なのは、やはり人づくりなので、3回目は人づくりにテーマを当てていきたい。</p> <p>最後に言いたいのは、小平を内側から見ることも大事だが、もうひとつは全国の、小平とは違うまちを見たり訪ねたりすることによって、改めて小平が見えてくることもある。ぜひ他者の例にも関心を持って、その上で小平をもう一度見ることで、さらにはっきり小平が見えてくると思う。まったく違う状況にある自治体でも、小平に持ってくることができる仕組みとか、模範になる取組も全国にあると思うので、アンテナを立てて、小平というまちが日本の中でどういう位置にあるのか、もしくはどういう方向を目指していくのかということを常に確認することが、小平の魅力をさらにつくることになると思う。</p>
<p>市長</p>	<p>本日も多くの意見・提言をいただきありがとうございました。次回は最後の会議となるので、よろしくお願ひします。これで本日の会議を終了します。</p>

(文責：事務局)

平成 21 年度第 3 回小平市市政アドバイザー会議要旨

開催日時	平成 22 年 2 月 8 日（月）15 時 05 分から 17 時 00 分まで
開催場所	小平市役所 5 階 503 会議室
出席者	<p>小林 正則 市長</p> <p>粕谷 英雄アドバイザー（農業体験ファーム「みのり村」農園主）</p> <p>関 幸子アドバイザー（NPO 法人 地域産業おこしに燃える人の会 理事長）</p> <p>馬場 悦子アドバイザー（NPO 法人 小平・環境の会 理事長）</p> <p>（事務局）伊藤企画政策部長、有川政策課長、篠宮政策課長補佐、相澤主査（傍聴者 2 名）</p>
会議次第	<ol style="list-style-type: none"> 1. 開会 2. アドバイザーからの問題提起、意見交換 3. 閉会
市長	<p>8 月の 1 回目のアドバイザー会議では、アドバイザーの皆さんの体験などを通して、小平のまちの活性化の可能性や方向性について、ご議論、ご意見をいただいた。11 月の 2 回目の会議では、小平の魅力について、少し掘り下げた形でお話しをいただいた。</p> <p>本日の会議では、「まちを盛り上げるための人づくり」のありかたとして、地域の人材づくりやネットワークづくりと行政の役割などが、論点として考えられるかと思っている。また、最終回の会議として、総括的な視点から、小平が魅力あるまちであるためには、といったこととお話しいただければと思っている。</p>
関アドバイザー	<p>小平市を外側に対してどうアピールしながら、内側の強みをつくっていくのかということが、今年度の市政アドバイザー会議の課題であるが、1、2 回目の会議を踏まえて、やはり小平市は住宅地なので、住んでいる方がどう動きながら、一人ひとりが地域で魅力ある生活をして、経済的にも自立をして、全体を通して小平というまちが継続的に魅力的であるような方向に行くための人づくりというところを中心に、話を進めたいと思う。</p> <p>人づくりといってもなかなか難しいが、それぞれの分野に人づくりの種がまかれていると思う。例えば粕谷アドバイザーの体験農園では、地域の農と周辺の方々の「土」を通しての人づくりがあるし、馬場アドバイザーの「菜の花プロジェクト」などでは、女性、地域の主婦のネットワークの中から、生活の目線に立った事業をやることによって、人づくりが行われていると思う。</p> <p>もう一つ小平は強みがあって、大学を含めた知的財産を持った教育機関が</p>

	<p>もともと多い地域だが、1、2回目の会議ではこの部分話していなかった。大学なり、専門学校なり、教育機関とこの地域との関わり合いがあれば、具体的に事例なども話してほしい。</p> <p>今年度、私はたまたま小平市職員の政策研究プロジェクトのアドバイザーも引き受けているが、プロジェクトの若手のメンバーがこの地域を走り回って、大学や専門学校のよいところも見つけてきている。市内に国際パティシエ調理師専門学校があり、また小平は和菓子屋が多いまちだと感じている。商店街の中に、よい老舗の和菓子屋さんが残っている。スイーツなども地域の特色になるのではないかと。また最近、若者にパティシエになりたいという意気込みも強いし、男子も甘いものが好きという時代になってきている。お菓子の専門学校があるということも地域資源であり、農とコラボレーションしたり、もしくは母親たちの活動の中にスイーツを入れていったりということ、大学や専門学校との連携という部分も見えてくると思う。せっかくある地域の資源としての大学、専門学校との連携の視点で意見を聞きたい。</p>
<p>粕谷アドバイザー</p>	<p>国際パティシエ調理師専門学校の話が出たが、国際健康植物科学専門学校や、国際ビジネス専門学校などがグループ校になっていて、いろいろな分野にわたって開いている。私は講師をしていて、調理をする生徒たちにも、食材がどういうふうに使われるかということで、私のところに実習に来させている。素材から興味を抱くことは、最初からはなかなか難しいが、それなりに知識を得て帰ってもらっており、そういう意味では私のところとは連携がとれている。また、専門学校の1階では、経営としてレストランを開いているが、小平の野菜を使って調理をしていこうという取り組みをしている。農協の直売所を窓口で食材を集めており、地域との連携が回り始めてきた状況かと思っている。</p> <p>私としては、もう少し農業系の学校があるとよいなと思っているが、その分野が縮小傾向にあるのは残念である。その他には、卒論などで農業関係に触れる学生たちが、時折近くの大学から私のところに来るという状況はある。</p>
<p>関アドバイザー</p>	<p>今、レストランの話が出たが、昨年11月に、三重県の多気町というところに行ってきた。そこには調理師免許の取れる高校があり、その土・日のクラブ活動として、高校生だけのレストラン「まごの店」をやっている。人材教育の一環として、強制ではなく自主的なクラブ活動としてやっている。1日250食作るが、メニューを決め、メニューに合わせて250人分の食材がどれくらい必要か、どこまでの材料を使うか、高校生が原価計算、仕</p>

<p>馬場アドバイザー</p>	<p>入れ数量の計算もする。</p> <p>調理師学校は通常、料理は教えるが、実際にレストランを経営する場合の経営マネジメントはほとんど習わない。しかしそこは高校生がレジも自分で打ち、経営マネジメントをしていて、年間6千万円くらいの売り上げのレストランになっている。予約はできず先着250名様となるが、お客が並んでいて、県外からも来る。</p> <p>人材育成を地域でしっかりしていく取組みである。その高校生は、ほぼ100%就職が決まるという。料理ができるだけでなく、接客やレジが打てる、また原価計算を含めた経営人としての資質が身につけているということで、学校としても卒業生を就職させることができる。就職率がよいということは入学希望も多いということになるので、非常にうまく成功した事例として見てきた。</p> <p>その教師の熱意にも大変感激したが、なぜこうしたことができたかという、町役場のほうで、せっかく調理師学校があるのならということで、レストランのハコ（施設）は補助制度を使って町が整備している。ちょっとした資源をうまく連携させて、有名にし魅力的にして、県外からも人を呼び込み、テレビ局も相当取材に入ったので、町も有名になり、その学校の先生は、今や全国のそういった調理師免許を取れる学校のアドバイザーにもなったりしている。食材は地域のもので、地域経済の活性化にもつながり、好循環になっている。高校生だけのレストランは話題になるし、地域が応援したくなる要素もある。学生は、平日は学習しているので、店は土・日の営業で、250食限定なので数時間しか開いていないというやりかただが、話題を呼んで、250食があつという間になくなるというふうになっており、人をたくさん呼び込んでいる。</p> <p>レストランだけでなくスイーツも話題になると思う。人材育成の取組みとしても、小平版を考えてみるというのもよいのではないか。</p> <p>前回の会議ではコミュニティビジネスの話も出たが、今なかなか就職難という問題もある中で、住んでいるところで起業ができれば、率先して市が支援して、そういう動きをつくっていくのはよいと思う。</p> <p>小平にも、主婦でコミュニティレストランやコミュニティカフェを起業する人がいて、私の家の近所にもある。そこは、普通の家で食べるようなご飯を出していて、グリーンロードに面したお店で、季節のよい時期は眺めもよくお客で満杯になる。お客は主婦層が多かったのだが、最近客層が変わってきて、若いカップルや男の人が一人でふらっと来たりしている。「家ごはん」というものがなかなかとれず、そういうところで普通の食事を食べたいとい</p>
-----------------	--

う層が、若い人の中でできている。そこは、野菜は地場のものをけっこう使っている。また、もう少し地域と連携したいということで、地域で売っているいろいろな商品をそこに置いたりとか、地域の情報、いろいろな活動のチラシなどを置いたりして、来た人がご飯を食べると同時に、地域のいろいろな情報を得て生活に役立てるとか、夜はコンサートを開いたりもしている。

そういうレストランを見ると、結構学生も来ていて、大学生といろいろな人が触れ合う場にもなっている。もっとそういう店が地域に増えると、まちのコミュニケーションも円滑になってよいのではないかと思う。例えば粕谷アドバイザーの農園の近くに、粕谷アドバイザーのところの野菜を使ったコミュニティレストランなどができるとよいなと思う。

また、私は、NPO法人「小平市民活動ネットワーク」に入っていて、「小平元気村おがわ東」に、平成22年4月から開設される「市民活動支援センター」の指定管理者として運営を任されることとなった。市民団体が指定管理者になるので、市民の目線でニーズに応えるようなセンターにしたいということで、市と打ち合わせをしながら、内部でも検討を重ねている。

この「小平市民活動ネットワーク」は、大学との連携をしてきている。小平市社会福祉協議会と、武蔵野美術大学・嘉悦大学・白梅学園大学と組んで、年に数回、NPOセミナーを開催している。ここ数年は、さまざまな活動をしているNPOと各大学の学生のマッチングをして、学生にボランティア体験やNPO体験の場を提供しようということで、夏休みに1、2週間、学生が体験に行き、9月にその成果を発表するが、それが卒論につながった学生もいるし、そのまま夏だけでなく活動に携わるようになった学生もいる。学生と市民活動が仲良くなってきた。

市民活動にとっても、それは大変うれしいことで、私がやっているNPO「小平・環境の会」は、生ごみを堆肥にして畑で野菜を作っているが、そこに学生が何人か来てくれて、若い力が入ってくると、畑を耕すことなども大変助かる。学生にとっても、例えば武蔵野美術大学から来た学生は、いろいろな写真を撮る。私たちは野菜を作る作業をやっているだけだが、畑の仕事以外の発見がその子にはあって、土が温かいということや、畑の生き物の観察をしたり、小平にはこんなに自然が残っているんだとか、私たちも助かるし、学生にも発見があって、よい雰囲気が進んでいる。

3年くらいやってきていて、毎年学生は入れ替わるが、これは小平に大学があるから可能なことで、もうちょっと発展できるようにNPOセミナーで仕掛けていきたいと思っている。ボランティア体験だけでなく、そこで培ったものを仕事に活かして行って、本当は小平で起業できるようなところまでつながれば理想だが、そこまで行かなくても、次のステップを小平で広げら

	<p>れるようなことができると思う。</p> <p>ももとは白梅学園大学が福祉関係のセミナーをやって、そこにいろいろな大学の先生が入っていて、せっかくだから学生を地域に出したいということで、そこに「小平市民活動ネットワーク」や社会福祉協議会が入って、実施してきている。</p>
関7トバヱ-	<p>皆さんの発意で、ゆるやかなプラットフォーム、交流の場ができています。</p>
馬場7トバヱ-	<p>先生や学生も忙しかったりして、人数がなかなか集まらないこともあったりいろいろあるが、ここまで継続してきている。</p> <p>最初は先生がセミナーの司会などをしていたのだが、今年くらいから全部学生が企画して進めている。学生は全然違う進め方で、ゲームを交えたりして、先生、市民団体、学生も一緒になってやるのだが、最後のマッチングのところではお互い仲良くなるために似顔絵の描きっこをしようとか、異世代交流で面白い。</p>
関7トバヱ-	<p>そういった連携を、もう少し皆さんに知ってもらえる機会があるとよい。意外と知らない方が多いのではないかと。また、せっかくプラットフォームができていますので、ほかの大学にも加わってもらえるとか、インターンシップを含めて大学で単位がもらえると、先生も背中を押しやすいし、学生も参加しやすいしメリットが出てくる。今はお互いの信頼でやっているが、これを「仕組み」にできると、もっと根を張るのではないかと。</p> <p>行政側がここを手伝うともっと広がるとか、例えば広報など、直接行政が関わらなくても、行政のネットワークを使えばこういうところがもっとよくなるというようなことはないかと。</p>
馬場7トバヱ-	<p>行政に一番期待することとしては、やはり行政の広報はとても効果が高く、市報に載ると、集客が全然違う。</p> <p>また、行政の職員も市役所の中ではなく、外に出ているいろいろな体験をされるとよいと思う。いろいろな人と知り合えるし、仕事に帰った時にそれが役に立つと思う。職員が学生やNPOの活動の中に入り、市民の動きを肌で感じるような場を体験してほしい。市というよりは、市の職員に一個人として一緒にやってほしい。忙しいからとよく言われるが、そういった体験は無駄にはならず、仕事に還元されることだと思う。</p>
関7トバヱ-	<p>市役所は「組織」で仕事をしようとするが、市民活動は「個人」でどう関</p>

<p>市長</p>	<p>わかることができるかが問われると思う。市民も学生も、「市役所の人」というよりも、個人のお付き合いをしたい、それによって市役所が身近になるのではないかと思う。組織を外れてやってよいのかという市役所の職員の迷いもあるが、これから地方分権、地方自治、地域へ地域へという流れが出てくると、組織だけではなく、個人としての力量、関わり方を問われると思う。</p> <p>大学は市内に6校あり、また朝鮮大学校、職業能力開発総合大学校、関東管区警察学校、国土交通大学校、専門学校など、教育機関が多い。駅も多く、農地があり、ビルやライブハウスもあるなど、それぞれ平均的な施設、装置はそろっている。それなりに満たされているので、突出するものは出てこないが、大きな事業ではなく、コミュニティビジネス、市民事業、自分が住んでいる地域での事業を、市民が行う素地がある。大学などと連携をして、そのもともと持っている部分を刺激する。市役所が全部やるということではなく、行政は多様な主体があってよいと思っており、そういう受け皿、人材をどうつくっていくか。</p> <p>人づくりは時間がかかるが、例えば学生がそのまま住みついて、新しいカルチャーをつくっていく。今、大学とも連携をしていて、武蔵野美術大学とはコミュニティタクシーのデザイン、白梅学園大学とは発達障がい児支援の分野など、学生に実践の場を提供してやってもらっている。実践の場をできるだけ提供し、小平市にあるいろいろな資源とコラボレーションしてネットワークを築き、成果が出るのは10年、20年先になるかも知れないが、そういった人材育成をしていくのがよいと思う。実践をした人がふえていくことが大切で、粕谷アドバイザーがやっている体験農園などで刺激を受けた市民は、農の楽しさを肌で感じると、土と関わらずにはいられなくなる。そういう人たちが、市が間に入って農地の貸し借りなどの農家の不安を解消し、「菜の花プロジェクト」のような取組みがいっぱいできて、未利用地を借り受けて活動できたりするとよいと思う。</p>
<p>粕谷アドバイザー</p>	<p>学校が多くあるという特色は、活用しないともったいないと普段から思っている。また、市民活動団体がたくさんあり、活動団体と市の連携や、団体同士の連携——例えば馬場アドバイザーのNPOの堆肥を、私の畑で使う取組みなど、出会い、連携により次が生まれてくる。時間を重ねるごとに、そういうものが生まれるとよいと思う。市民活動団体が出会える場所、情報交換できる場、市報等でもよいし、あるいは誘導的・積極的に結び付けていてもよいのではないか。</p> <p>それから、例えば「産業振興の分野で、どここの会はこんなに活躍して</p>

<p>関アトバヱ-</p>	<p>くれた」とか、ひとつ市が評価をしてあげてもよいのではないか。これはお金をかけずともできることなので、評価をして、どれだけ役に立っているということを皆に知らせてあげると、「私もやってみたい」という刺激にもなる。仰々しく表彰するというのではなく、アピールすることを前提に、評価をしてあげられるとよいのではないか。各課の関連の分野でそういうことをやってあげると、評価をされると人はうれしいものなので、効果が非常に高いと思う。自然に柔らかく、できれば少しユーモアを加えたぐらいの評価をしてもらえたらよいのではないか。</p> <p>年度、年度でいろいろな分野ごとにそういったものを出していただくというのも、よいかもしれない。例えば市報に載っている情報に対しては安心感があるし、地域の人々は市役所には信頼を寄せている。市から客観的な評価をもらったということが、第二、第三の活動につながる応援になるだろうし、信頼を広げていくことができる。お金もそれほどかからない。市民のみなさんの選定委員会でもよいし、学識者を入れた形でもよいし、ゆるやかな形でそういった評価ができるとうい。</p>
<p>馬場アトバヱ-</p>	<p>環境の分野であればエコショップの認定制度とか、商店街であれば、例えば地場野菜の割合が3割以上のお店ということで何かマークを付けるとか、農家でも何か特徴があればその認定をすとかいうことがあれば、消費者もそういうところで買うようになると思う。なかなか難しいかもしれないが、市が何らかの基準でお墨付きを与えれば、安心だしそこで買おうという気にさせるし、まちの活性化につながる。特徴的な事業者の情報を丹念に探っていくって、投票などで選んでもよいのではないか。</p>
<p>関アトバヱ-</p>	<p>それによって広報を兼ねる形になるので、知られるようになる。わざわざPRしなくても、PR効果が非常に高い。</p> <p>また、親しくなると「実は…」という話ができるものなので、親しくなるきっかけとして、先ほど学生のゆるやかなプラットフォームというのがあったが、もう少し市内全域の、分野を越えた農業者も入ったような市民活動の情報交換ができるネットワーク、場はあるだろうか。</p>
<p>馬場アトバヱ-</p>	<p>地場野菜に関心のある人はけっこういる。市民活動というと、難しいとか運動的とか敷居が高く思われがちだが、そうではなく、農家の本音を聞いてみようとか、地場野菜の話を聞いてみようとか、そういった講座をすることにより、市民と農家をつなぐということも市民活動の一つかなと思ってい</p>

<p>市長</p>	<p>る。市民がこういうことを聞きたいとかやりたいとかいうことが、これから「市民活動支援センター」のいろいろな企画の中で実現していくとよいと思う。</p> <p>NPO「小平市民活動ネットワーク」が今やっているのは、「連（れん）」という情報誌を出していて、小平市内と近隣でのイベント情報を紹介している。また、昨年「市民活動サロン」ということで、「小平・環境の会」の育てた野菜とJAで買ってきた野菜で、地場野菜の料理を作って食べながらお話をするというイベントをしたが、「これが市民活動なの？」というようなところにも、市民活動の発展する芽はいっぱいあると思うので、農業、商業の方とも連携していきたい。</p> <p>農家の若手で、やる気のある人もけっこういる。若手も親父と二人で農業をやっているとかで、情報過疎のようなどころがあったりする。もっといろいろなつながりを持って、若い人を育てることも大切だと思う。これは市がやるといっても、なかなか市は予算の単年度主義ということもあり、継承していけない。そういう人材育成ができるのは民間の活動団体なので、連携してほしい。</p>
<p>粕谷アドバイザー</p>	<p>たしかに農業者は農業界だけの付き合いで、他業種との出会いや、共有の場を持つことがなかなかない。</p>
<p>関アドバイザー</p>	<p>ネットワークのつくり方として、商工会や農協が一緒になって、若手人材育成塾のようなことを、分野を越えて共同主催のような仕掛けはできないか。</p> <p>以前に人材育成塾に携わったことがあるが、農・商・工、IT産業などすべての分野から参加してもらい、毎回25人くらいで5期やった。その100人ほどがうまく育って、その後10年経ったので、今ちょうど中堅の社長やトップになって、よいネットワークになっている。</p>
<p>市長</p>	<p>行政は、どうしても予算をつけると短期での成果を求められがちで、市長も任期があるので最低でも4年で結果を出さないと、ということになる。人材育成は10年、20年のスパンのものであり、未来への投資で、結果の検証は短期間ではできないので、市がやるのはなかなか難しい。</p>
<p>馬場アドバイザー</p>	<p>異業種交流会のような場を設定する仕組み、制度を作って、何か成果が生まれるかどうかはわからないが、何人参加したとか、どういう話題が出たと</p>

	<p>か、そういうことの積み重ねで、それを1、2年で終わらせるのではなく、10年くらい続けることによって、そこから何か生まれてくるものはあると思う。農業でも商業でも、まだ上の世代がたくさんいるので、若い世代の意見はなかなか反映されにくいように思う。JAとか商工会という垣根をとっぱらったような、若手のやる気のある人たちを集める場、仕組みを設けると変わっていくのではないか。</p>
<p>関7トバヱ-</p>	<p>研究会、勉強会でもよい。</p>
<p>馬場7トバヱ-</p>	<p>既存の組織も必要だと思うが、違う視点からの働きかけも必要なのではないかと感じる。</p>
<p>粕谷7トバヱ-</p>	<p>商業も農業も、家族労働が中心で、世襲でくると、実権を持つのは親の代で、若手はなかなか出る場面も限られてくる。30代くらいの、将来に夢もある一番エネルギーのある世代を刺激するのがよいと思う。前回の会議でも、人材育成のためのセミナーを開いてほしいと言ったが、私も昔、関東地区まで広げた農業青年団体で、組織的にいろいろな研修会を持ち、他県の人と交流したりする機会があったが、今は限られた中でしか交流がない。いろいろな人の話を聞いたり学習できたり、市を越えて広い範囲でできるとよいと思うが、そういう団体が今農業に限らないように思われる。農業だけでなく、商業でも、同じ世代は共通の話題もあるだろうから、そんな組織ができれば本当はよいと思う。</p>
<p>関7トバヱ-</p>	<p>小平市は成熟した市民、既にみずから活動をしている方も多いが、何らかのきっかけを待っている人も結構いるのではないか。きっかけがあれば実は動き出すが、とりあえず今はまだスタートラインのままという方もいるので、大学のネットワーク、農協、商工会、市役所を入れたゆるやかなネットワークの中で、塾でも研究会でも、幅広い人たちが入れるような仕掛けができるとよいと思う。そういったものは、市だけが動かすわけではないが、市が入らないと動かないのではないか。</p>
<p>市長</p>	<p>市がやるといろいろな限界、制約はある。そういったネットワークは、やはり市民が音頭をとって、市は間に入り、主催にはならないが共催団体になるというようなことだと思う。</p>
<p>馬場7トバヱ-</p>	<p>ただ、市役所は縦割りで、仕事が部署に分かれていなければならないのはわ</p>

	<p>かるが、もう少し柔軟性を加味してもらえると、市民はやりやすくありがたい。NPOは、けっこう分野をまたがって活動する。NPOが市と連携して何かやろうという時に、市は全部担当が分かれているので、ごみのことはごみ減量対策課、生ごみを堆肥にするので農家にとすると産業振興課となるが、そこがどうもうまくつながらない。もう少し横断的に柔軟な対応ができないか。</p>
<p>市長</p>	<p>経験の中でやっていくしかないと思う。各課や各部にまたがる場合には、組織が柔軟に対応する訓練をするしかない。市民が行政に課題を投げかけて、行政が臨機応変に柔軟な組織対応ができるように訓練するしかない。市役所を変えていくのも市民である。市民と接点の多い職員の思考は、柔軟になる。</p>
<p>馬場アドバイザー</p>	<p>職員研修として、協働の勉強会を開くとか、職員が外に出て現場で市民と活動する機会をつくることもよいのではないか。反面、市民も成熟していかなければならないし、両方が育ち合っていかなければならない。</p>
<p>関アドバイザー</p>	<p>粕谷アドバイザーが言っていた広域的な連携も、これからすごく大切になると思う。域内での異業種の交流も重要だが、近隣市など広域での連携の仕組みも考えられるとよい。市の職員も、広域の研修に行くと、同じ課題に全然違うアプローチをしている自治体もあり、非常に勉強になる。ネットワークをつくることも、地域を越えて広げると、逆に小平らしさをもう一度見つめ直せるかもしれない。</p>
<p>粕谷アドバイザー</p>	<p>比較することにより、小平のよさを再確認できることもあるだろう。</p>
<p>関アドバイザー</p>	<p>団塊の世代が地元に戻る時期で、シニアの皆さんは地域と関わりたいはずなので、ちょっとしたきっかけがあれば動き出すだろうと思う。若い人の大学との連携を含めた人材育成と、市民力を養っていく地域連携と、それぞれの仕組みづくりを少し考えていけるとよいと思う。</p> <p>最後に総括を含めて、今年度、3回の会議の中で小平のよさは大分見えてきているが、よいものを持っていても、それを見せて、知ってもらわないと伝わらない。小平市は地味めな自治体でもあるので、よさをもっと知ってもらうためのアピール、発信の仕方・仕組み、もしくは一人ひとりの市民が、小平市民としてのプライドを持ちながら、小平をどうアピールしていくか。小平らしさをどう見せていくか、外に向かってどうアピールし、市民にもど</p>

<p>粕谷アドバイザー</p>	<p>う知ってもらおうのかについて、議論したい。</p> <p>今までの話とつながってくるが、私は、大きい組織などを立ち上げることはなかなかできないが、農業振興という立場から、地域に対して何かできるか、自分の持ち味である農業を活かしながら、地域に浸透し、地域を活性化させる、農をもとにした地域づくりに関与していきたい。体験農園という媒体を使って、小平に住んでいてよかったと言われるような取組みを、今後していきたいと思っている。発信としては小さいかもしれないが、自分が活かせる形として、勉強しながら取り組んでいきたい。</p>
<p>関アドバイザー</p>	<p>粕谷アドバイザー自身が、ある意味で歩く広報というような形になると思う。学生など若い方の協力を得るなどして、ブログやインターネットの発信などもされてはどうか。粕谷アドバイザーのような「本物」を持っている人が、よいツールを使うとすごく強い。</p>
<p>馬場アドバイザー</p>	<p>インターネットの力はすごいなと思っている。最近は、70代の方でも、インターネットができないと情報が取れないから勉強しようか、という人も出てきている。それだけに頼ってはいけませんが、ツールとしてはすごく大きい。</p> <p>小平市は観光協会がないので、先日「地域づくり総務大臣表彰」ももらった「グリーンロード推進協議会」が、そういう役割を担うとよいなと思っている。小平市の周りを、グリーンロードということで、玉川上水、狭山・境緑道、野火止用水がめぐっているが、これは珍しいのではないかと考えていて、これを発信しない手はない。まちおこしも、グリーンロードを中心にしていくとよいのではないか。市外から来てもよいところだし、私たち市民にとっても癒しの場になっているし、そこに関わって緑のボランティアなどの活動の場にもなる。そのへんをもう少し発信したいし、「グリーンロード推進協議会」のホームページに携わっているが、もっと充実させなければと思っている。</p> <p>それから、市から補助金を受けて「菜の花プロジェクト」の活動を紹介するパンフレットを作った。「菜の花プロジェクト」は、今2か所になっていて、2か所めのほうにもボランティアグループができている。パンフレットを作ってよかったのは、視覚的に見えるものがあると、何をやっているかをすぐ紹介、説明できる。今、「菜の花プロジェクト」の活動が小学校の環境学習の授業などにもつながっているが、そういうときもパンフレットを持って行って配ると、小学生も写真を見て何をやっているかがよくわかるので、非</p>

	<p>常に好評である。</p> <p>こういうツールを作って、どんどん発信していくことは大事だと思う。情報をほしい人はいっぱいいるが、情報を伝えることは非常に難しい。若い人には、若者独特の字体とか、若者に受けるようなリーフレットの作り方があある。若い人に対しては若い人の目を引くような形で作るとか、いろいろな層に伝わるような工夫をしていかなければならない。</p> <p>また、いろいろな場に出て行って、直接つながるといことは大事だと思う。灯ろうをグリーンロード沿いに飾る「灯りまつり」は、今年度は中央公園にも会場を広げたが、そこで粕谷アドバイザーが模擬店をやっていたという話を、いろいろな人から聞いた。そういうふうに出て行って宣伝することは、効果的である。チャンスがあるところにはどこにでも出て行くことが大事で、ネットもよいが、会って話すこと、対面もすごく大事だと思う。</p> <p>発信したいと思ったら、あらゆる手段をやる。相手が何を必要としていて、どうやったらその人に伝わるか、戦略的に情報発信することが今の時代は大事である。情報もいっぱい来るので、届く情報でないと、情報としてとってもらえない。うまく情報発信すれば、小平の中で、情報がほしい人、活動したがる人はいっぱいいるので、そこに効果的に届くと思う。</p> <p>粕谷アドバイザーや馬場アドバイザーには、今お二人がしている活動を、さらに仲間や次の世代に広げていってほしい。小平市がこれから売り出していくのは、そういうものだと思う。グリーンロードが活きるのは、粕谷アドバイザーや馬場アドバイザーが、いわばそれを支えているからである。遠回りのようだが、市民活動をしっかり市が支えて、人づくりをしていく。大学との連携などしながら、いろいろな人が協力しあって、行政と市民が協力し、人づくりと、それをベースにした活動をうまく連携して、売りにしていく。派手さはなくても、本物の豊かな市を目指したい。</p> <p>今年度のアドバイザー会議では、1回目は小平市の魅力について、2回目はそれをどうブラッシュアップしていくか、3回目の今回は、中心となる人材、人をどう育てながら、小平の魅力をつくっていくかということで議論をしたが、3回を通じて思ったのは、人を育てることと事業をしっかりとやること、情報を発信することは別々のことではなく、具体的に動くこと、活動することにより、その中で人が育ち、育ちながら見えてくる事業の中の本物をしっかり発信することにより、小平の魅力がちゃんと伝わるようになる。</p> <p>馬場アドバイザーが言われたように、インターネットはよいツールだが、</p>
市長	
関アドバイザー	

直接顔の見える内側の関係がないと、実は伝わらないというのは、情報の本質をついていると思う。ツールを使うと同時に、一番は、地に足の着いた事業をしっかりとやるのが、遠回りだが人材育成につながるということが今日の結論だったかと思う。

あわせて、行政ができることと、また市民力が非常に高いので、協働の領域がもっと広がりながら、官と民が歩み合い、お互い持ち寄って、その持ち寄ったよさを活かして、小平の真の豊かさと魅力をつくっていただければよいのではないか。一番はやはり、人づくりと事業と情報がそれぞれ連携することによって、最終的に小平の魅力がはぐくまれると思う。

私は三鷹市に住んでいて、以前も言ったが、小平市は母の実家もあり第二のふるさとである。よくここまで変わらずに、多摩、武蔵野台地のよさを十分に残していることは、小平市の最大の強み、魅力だと思う。豊かな自然を活かしたまちづくりを進めていただければと思う。緑を守ることによって、エコの産業が起きたり、新しい農業の手法が生まれたり、内発型の産業も起きるはずである。コミュニティビジネスもそうだが、産業は人の生活の周りで起きるものであり、多摩の新しい産業の力も生んでいただければと思う。

(文責：事務局)

平成21年度
小平市市政アドバイザー会議報告書

平成22年6月発行

編集・発行 小平市企画政策部政策課
〒187-8701
東京都小平市小川町2丁目1333番地
電話番号 042-346-9503
電子メール seisaku@city.kodaira.lg.jp
300円